

4.23

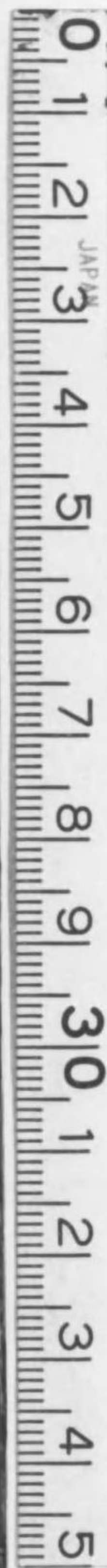
診

病

奇

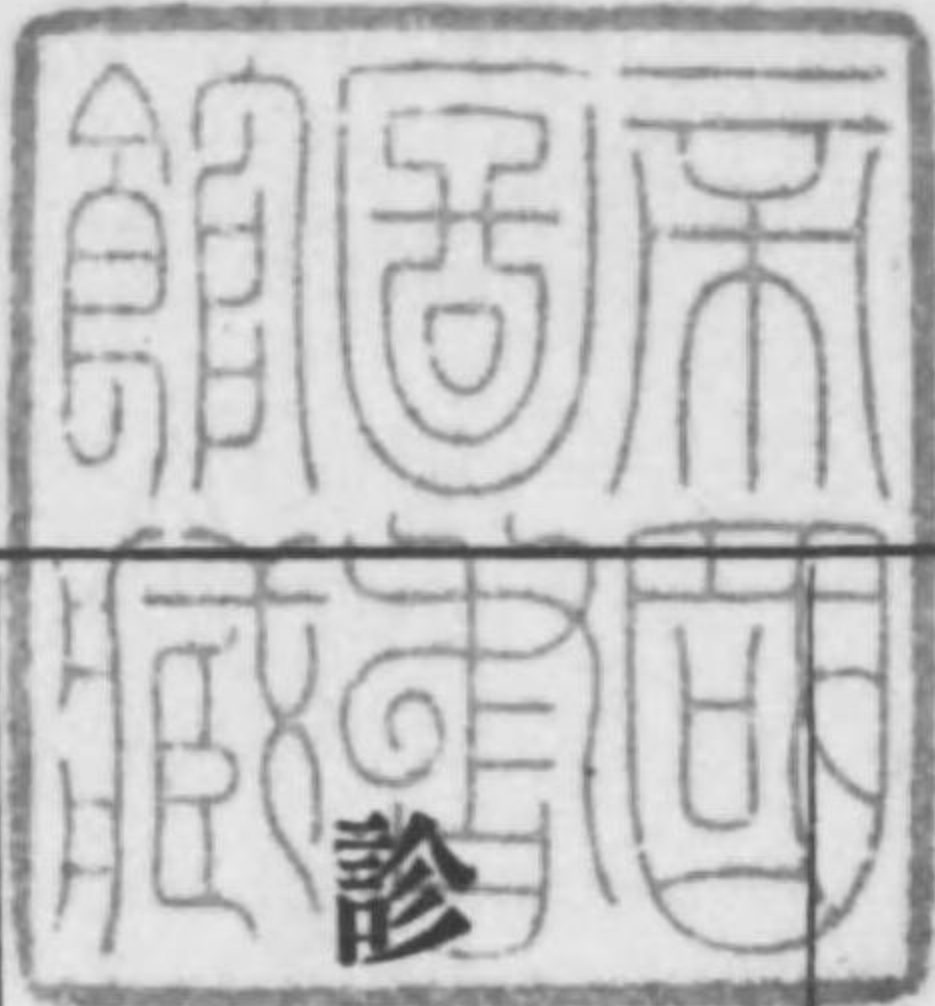
核

302
204



始





多紀蒞庭先生編

病奇咳

和漢醫學社發行



各種の診法と本書

古來の診法に望聞問切の四者があり、又之を神聖工巧とも云つたことは、改めて申す迄も無い所である。即ち望んで病を知るのが神であり、聲を聞いて知るのが聖、證を問ひて知るのが工、脈を切して知るのが巧であるが、徳川氏の中世、古方の大家後藤良山は、之に按腹と候背とを加へて六診とし、其子椿庵は、更に嗅診を加へて七診とし、艮山の門人香川修庵は、師の所謂六診を祖述し、漢蘭折衷の大家本間棗軒は、専ら問切望聞按腹の五診を推奨したのである。併し其何れもが、腹診を以て重要缺くべからざるものとしたことは、前後同一であり、後世に至つては、之を以て一家を爲す者をさへ生じたのである。

◇

尤も腹診の法は、昔時支那にも行はれたもので、既に素問の脈要精微論にも「觀_三五藏有餘不足、六腑之強弱、形之盛衰」と見え、類經註には、是れ「觀_三藏府虛實、以診_三其内、別_三形盛衰、以診_三其外」とある程である。が併し其法の缺けたるや久しで、遂に其詳細は、後世に傳はらなかつたやうである。随つて我國でも天正慶長の頃、竹田定加が始めて按腹の法を唱へ、夢分、御菌意齋、北山壽安などが亦其説を爲し、次で寛永の頃、竹田定快が診腹精要を著して、其法を論ずるに至れるのを以て、その

濫觸とし、又其が大に用ひられるやうになつたのは、矢張り前記の後藤良山が、按腹候背の二者を診法中に加へてから以後のこのやうである。即ち良山は「百年泰平遊惰之人、腹裏悉結瘕疝、内傷諸疾、因是釀成」と云ふことを主張した結果、腹診は頗る重要性を加ふるに至つたのであるが、良山に次では堀井元仙があり、其他淺井圃南や、高邨良務等の諸家が出て、其法は稍々備はるに至つたのである。良山の門下香川修庵に至つては、其一本堂行餘醫言の巻頭に於て、「吾門以按腹爲六診之要務」と述べ、之を以て腹裏の瘕疝の位置、大小、形状、硬軟を的識し、邪熱肌熱を辨知し、皮膚の腫脹、潤澤枯索、肥瘦張弛を候察し、以て動氣の位置、状態、妊娠、血塊等を覺知することを、其根本としたのである。

が、更に古方の泰斗吉益東洞に至つては、一層腹候に重きを置いた。即ち東洞は「腹者有生之本、故百病根於此焉、是以診病必候其腹、外證次之、蓋有主三腹狀一焉者、有主三外證一焉者、因其所主、各殊治法」と言ひ、又「先證不先脈、先腹不先證也」と説き、以て疾病を診するには、主として腹候と外證とに因るべしと論じたので、許多の門人が、皆腹候を重んじ、殊に瀨丘長圭の如きは、遂に腹診を以て一家を爲すに至つた程である。診極圖説は即ち其有名の著書であるが、長圭を祖として起つた者には、稻葉文禮(腹證奇覽)、和久田寅(腹證奇覽翼)等があり、更に奥田鳳作、森中渠

粟屋宗柳、加藤謙齋、味岡三伯、橋玄悦、白竹子、山脇東洋、萩原春庵、畑黃山、福井楓亭、和田東郭、荻野臺州、鑿庭東庵、松岡恕庵、瀧鶴臺、津田玄仙、太田隆元、原南陽、高階枳圃、有持常安、和田春長、柘植叔順、今泉玄祐其他の諸家がある。が併し以上諸家の粹を輯めて、腹診法を完成したものには、多紀豊庭の診病奇候、及、診腹要訣の二書がある。本書は即ち其前者であつて、北山壽安以下十七家(或は三十二家)發明の要旨が列擧されて居り、其書名に就ては、「四診の正法に非ざるが故に奇候と名づく」としてある。

多紀元堅、通稱安叔、字は亦柔、豊庭と號す、一號三松。多紀桂山(元簡)の次男である。幼より家學恢弘の志があり、天保二年醫學所の講師となり、六年奥詰に擧げられ、七年侍醫に任じ、法眼に叙せられた。次で法印に進んで、樂真院と號し、後樂春院と改めた。學識該博、治療亦精妙を以て聞え、小島學古、喜多村香城の二家と共に、當時の三名醫と稱せられた。安政四年二月十四日歿、享年六十有二歳である。著書には素問紹識、傷寒論述義、傷寒廣要、金匱要略述義、名醫彙論、雜病廣要、女科廣要、藥治通義、時證讀我書、同續篇、診病奇候等がある。

本書は九折堂山田椿庭、其他諸名家の舊藏本(森枳圖書入本)を底本とし、同じく調元堂若尾某の舊藏

本、帝國圖書館本(津山某舊藏)、並に長友大塚敬節、木村長久兩氏愛藏の漢譯松井本等を参照すると共に、尙其疑點に就ては、原本たる腹診書(堀元仙)、一本堂行餘醫言(香川修庵)、醫療手引草(烏巢道人)、内證診法(淺田南溪)、和田腹診錄、及、蕪窓雜話(和田東郭)、臺州腹診錄(荻野臺州)、療治茶談(津田玄仙)、醫事小言(原南陽)、腹證奇覽翼(和久田寅)等に就て、潛越ながら若干之を補訂したのであるが、所謂此底本は、有名なる森根園先生が、嘗て同家々傳の秘本に依つて、界欄上に書入れを行はれて居る所の珍本の寫である。其事は本書の末尾(第九十三頁)に於ける同先生の記入に依つて明瞭であるが、尙臟腑の部位を知り易からしめんが爲には、矢張り同先生の附載された「臟腑部位」(第九十五頁)があり、更に味岡三伯の「診腹秘傳」(第一百頁)も添へられて居るのである。診病奇悞の終りに、多紀先生附載の「五雲子腹診法」のあることは、申す迄も無い所である。山田椿庭先生も亦若干朱點を加へられて居ると思はれるのであるが、同じ記入でも左の六項は、校刻者が帝國圖書館本(本文中、帝本)に據つて、便宜上記入せるものである。即ち序文の終りの(一)「森約之櫻庭案、所謂四診云々」、(二)採摭諸家中、櫻庭某の下「東庵ノコトナリ」、(三)第十九頁「凡腹裏之瘕及疝云々」の項中枯索の下「立之按、胸上篇云々」、(四)第九十五頁臟腑部位中「脾ノ俞」の下「共之ハ即中虛ナリ」、(五)同第九十六頁腸肉の下「立之謂、云々」、(六)更に第九十九頁三圖の次「立之按、千金云々」等の諸項である。

兎に角斯の如く、若干手を盡した積りなるに拘らず、本文中に尙幾分了解し難い點があるのは、校刻者の窃に遺憾とする所で、之は偏に博雅の士の是正を俟つ次第である。

尙所謂松井子靜子の漢譯本は、我國に於て特に發達せる之等の方法を、清韓の醫にも傳へんが爲に行はれたもので、明治十一及二十一年、清國に於て刊行された所のものである。爲に同國人傳某以下の序跋文が、幾篇か載せられて居るのは無論であるが、其採摭氏名に至つても、北山壽安以下三十二名家の氏名が列擧され、又其説が收録されて、椿庭先生其他の舊藏本に、十七家の所説が採摭されて居るのは、相當其内容を異にして居るのである。随つて其取捨選擇に就ては、大に惑はざるを得ないのであつたが、併し漢譯者の松井子靜子は、菴庭先生の嗣雲從先生の門下であるから、其内容は先づ此漢譯本に従ふのを以て、適當とすべきであり、其原本は、多紀家に於ける増訂本と觀るのが至當であらうと考へられる。依つて本書に於ては、椿庭先生の舊藏本を底本とし、松井子の漢譯本に據つて、其足らざる所を補つたのであるが、此漢譯本から收録せる諸項には、各本文の冒頭に△印を附し、且(引、松井本)として舊本と區別することにした。

校刻者が今回参照し得た所の漢譯本の一は、偶然にも譯者が自ら朱點を加へ、又別に其由來を書き添へた所の珍本で、長友大塚敬節氏の愛藏に係るものである。本書の校刻に當つて、圖らずも之等諸先

生の愛蔵本を彼此参照する機会を得たことは、私の最も光榮とし、且感謝に堪へざる所である。

皇紀二五九五年 昭和十年十一月

石原保秀識

診病奇咳

皇國候腹之訣、於古聖診法之外、別闢門徑、實與望聞問切、足以相表裏、蓋是二百年前、名醫之所發悟、而後人推演其說稍繚、余嘗戢香爲編、以資日用、茲除煩存要、類而次之、俾子弟易于尋繹、以其非四診正法、故以奇咳名焉、抑余亦竊不能無一得、然秀菴所謂可以口傳、不可以書傳者、此其所以不敢辱入也、天保癸卯菊月、三松拙者、題于存誠藥室。

森立夫立之曰、書中所引中虛の説、家書と大抵符合せり、されど門人口授筆記にあるべければ、文は異なり、中虛手筆の家傳書には、意齋の門人、仲和より大槻泰庵仲和門人口授筆記する所の書、原本に就て中虛の父愚然五雲子門人に問ひたゞして記するものなり、今其書中より、一々抄出して、上方に録す、但腎間動氣の一條は、上堂の徒ならでは、妄に不許こと故略す。

淺井某名不知、これは若は西都の淺井周伯にてはあらざるや、同人傳書とて、十四經抄といふもの、元録寫本を家に藏せり。

味岡三伯診腹秘傳といふ書あり、大抵東郭壽安等の説と往々合す、但味岡は元録以前の人物と思はるれば、この方古くあるべきか。

(校刻者引、帝國圖書館本)

森約之櫻庭案、古今所謂四診者、盡醫之諸診法、止于此四也、其曰切者切迫也、按也、凡持脈按腹、上候頭面、中候腹背、下候腰足、循痺、拊痛、摸腫、求疹、皆是謂之切也、本邦近世學者、或謂切者但持脈之義者、大誤、可哂矣。

目 録

水	分	………	四一
中	腕	………	四〇
心	下	………	三九
胸	上	………	三八
動	氣	通	………
虛	里	………	二六
通	腹	形	………
部	位	………	二五
平	人	腹	………
下	手	之	………
絞	法	………	三
	説	………	一

多紀菫庭先生附載	附錄	死生	衆疾候	小兒	婦人妊娠	腹滿	心痛	肋下	腹兩傍	腹中行	小腹	臍中
	
		合	古	充	空	合	六	充	美	香	兒	醫

五雲子腹診法(森家秘本).....六七

森枳園先生附載

臟腑部位.....七

診腹秘傳(味岡三伯).....一〇一

採撫諸家

北山壽安

弟子尼子道竹に授る診腹法

森中 虚

其書題名なし、門人の筆記なり、卷末に、享保十七年とあり、中虚の祖父仲和其訣を松岡意齋に受く、意齋は澤庵和尚針術の師なりといへり

堀井對時

腹診書、對時名は元仙
其書は寛保二年に刻す

香川秀菴

行餘醫言

鳥巢道人

醫療手引草、診腹説、本朝老醫傳と題せり

橋 玄 悦

其書題名なし

白 竹 子

其姓氏を佚す、其書亦題名なし

無 名 氏

其書名を併佚す、

淺 井 某

其名を詳にせず、診脈秘傳

淺井南溟

内證診法

高邨良務

腹診秘傳、實曆中の人

和田東郭

診腹一家傳 別に雜話等數種

荻野臺州

腹候秘傳、門人渡邊淡記聞漢文なり
腹脈診奥、亦門人所記國字なり

饗 庭 某

饗庭秘説 或曰某は津田玄仙の師なり
其説また東郭に雷同するあり疑べし、(校刻者引、帝本、饗庭某は東庵のことなり)

津田玄仙

療治茶談

原 南 陽

醫事小言

和久田 寅

腹證奇覽翼

竹田陽山

以下十五家の氏名は松井子靜の漢譯本に據りて追加採録せるものなり、本文中に(△引、松井本)とせるもの亦同じ、(校刻者)

粟屋宗柳

味岡三伯

久野玄悦

山脇東洋

萩原春庵

腹診秘事

佚名氏

畑 黄山
 福井 楓亭
 太田 隆元
 高階 枳園
 有持 常安
 和田 春長
 柘植 叔順
 今泉 玄祐

俱三十二家

診病奇候

三松拙者類次



紋書説

○胸腹は、五藏六府の宮城、一身資養の根本、陰陽氣血の發源、内傷外感の所由にして、古より數多の診法を設けたるも、此藏府を知るべきためなれば、胸腹を診するより甚親切なるはなし、(對時)

○外病は脈にて知、内病は腹にて知るといふこと、誠に然り、腹は病の本なれば、腹をこゝろみざる醫師は、自由成兼ぬるものなり、乃至は、一年二年前にも、腹の厚薄虚實によつて、たしかに知れるものなり、(白竹)

○診腹の訣、其據とするところは、内經にては、刺禁論、難經にては、八難十六難の三篇なり、其外の篇にもあれども、此三篇を以て、腹部定むべし、さて内經難經何にて論ずるぞといへば、先最初に平人の常を論じて、次に病變を論ずるなり、難經に、離經の脈を論ずるにも、平人の脈を論じて、

次に離經を論ぜしなり、(支悦)

○療治を巧者にせんと思はば、必ず腹診に心を用ゆべし、死生を分ち、病の輕重を手近く考へ知るは、腹診にまさるものなし、其腹診を詳にせんと思はば、無病の腹を知るべし、無病の腹より、之を推して朝夕工夫勘辨せば、必ず其精當を得べし、怠るべからず、(南陽)

○凡腹診の教たるや、其不平を知るを要とし、病邪の細微を察するに至ては、診者の自得に在りとす、況や積聚癥瘕、水腫鼓脹の如きは、病形根を堅し、元氣暗に虚し、正邪相離て、腹診には虚を不現者多し、是症脈に憑て可治の病なり、然を腹象に泥て、驗藥を用ゆる時は、虚々の戒を侵す事あり、(對時)

○外感の病は、腹は頼みがたき者なり、傷寒などは、邪氣の病なれば、いかほど腹能くとも、死するものなり、去ながら、傷寒も腹に潤あつて、元氣強きものは、熱劇くても醒やすし、元氣弱く、陰分衰へ、虚火の亢りたるものは、邪熱と併せて、死症になりやすきものぞ、内傷の病は、腹を第一として、可考、病症いかほど重くても、腹のよきうちは死なぬものぞ、(良務)

○内傷の病に、腹に滯のなき事はなし、腹は藏府の居所なり、故に腹にあらはれずと云ふことはなき子細なり、既に病のあらはれざる先より、其身も不覺、いつとなく、腹に滯り痞へ出來て、以後に病證はあらはるゝものぞ、故に無病の人にては、腹を考へて、はや合點して、大病さし出づべしとこと

はり知る也。

下手之法

○病人に向て診腹するに、醫者一毫も雜念なく、專一に病人に尋ぬるに、食餌を致し來るや、又は空腹なるやと問ひ、其病人來りし遠近をも尋ね、遠方より來りし病人には、暫休息させ、又大小便の通利を尋ぬるなり、羸瘦したる病人ならば、大便通じたる即時は、いよくよはく見ゆるものなり又大便燥結したる病人は、腹がいよく實なるやうに見ゆるものなり、問尋ね、病人と醫者と神氣を合せ、さて病人を仰臥させ、胸前に手を拱せ、足跟をそろへさせ、ろくにするなり、其中にも、腹皮つよく脹て、動氣の見え難きは、病人の左右の足を少し揚げさせ可診となり、意齋の精しき教なり。(中虛)

○病人を仰臥させ、病根の所在を尋ぬるに不見ものあり、此時は病人を左の方へ横臥させて見ることなり、それにては病根不知ば、又右の方へ横臥させ診すべし、醫者の手と腹皮と和合して、死生吉凶を決すべし、中虛の南條玄什へ贈けるに、醫者手指與病人皮肉相忘而認得吉凶也と云へるは腹脉要訣にして、先生修行の上にての工夫なり。(同上)

○凡腹を診するには、先づ其人の氣を寧靜にすることを可教なり、若し努力すれば張り、恭敬すれば

堅く、笑語氣散ずれば變動多し、幼童婦女下等の人は、恐畏して只不呼吸を寧靜なりと思へり、故に呼吸平和にして眠りたる意になせと教ふへし、是捷法なり、(對時)

△(引、松井本)凡診腹之法、須診者與受診者、俱心氣平穩、胸中安定、而後下_レ手、使其仰臥閉_レ眼如_レ眠、徐々撫_レ胸上二三次、要_レ手裏軟々、隨_レ呼吸_レ行、無_レ阻_レ其氣、而先察_レ膚理之精粗疎密、次撫_レ其左右、上自_レ缺盆、下及_レ乳下、以知_レ其肥瘦_レ而候_レ乳下之動、動有_レ浮沈、氣有_レ緩急、肉厚者動伏不_レ應、次於_レ其心下、輕按候_レ其氣、重按察_レ其形、輕按平穩無_レ衝氣滯結、重按和緩無_レ塊物痞硬者、於_レ形狀_レ爲_レ平也、而中脘而臍中、候_レ之部位不_レ亂、臟腑相配、宗氣充_レ內、推_レ左脇、而右張、推_レ右脇、而左張者、實也、推_レ之部位、內移者虛也、爲_レ病難_レ愈、臍下丹田、真氣之所_レ聚集、應要_レ最有_レ力、上腹盈、面臍下無力、是有_レ所_レ失也明矣、若按_レ之有_レ物、重按_レ之拘攣、于上下脇法、腎堂_{公豐按腎堂即腰也}或痛、不_レ欲_レ得_レ診者、病已成不_レ淺也、此爲_レ診腹之太要、(陽山)

○下手の法、手の重さ、大抵難經の菽法に可_レ準なり、○輕手にて鳩尾より臍下に至て循撫し、皮膚の潤燥を試、部位の相應を可_レ定、○中手にて尋摺し、疹不_レ疹を問ひ、病邪の有無、腸下及諸空所の強弱、或は動氣の有無を可_レ診、○重手にて推安し、更に疹不_レ疹を問ひ、藏府の虛實、及沈積動氣の淺深を診すべし、(同上○南溪引古傳)

○下手の次第、○先胸膈より撫下し、○胃經通り、○任脉通り、○天樞、○臍下、○諸空所へ至り、

凡諸空所とは腹の四隅骨の隙を命て云なり、皆是藏府の居に遠くして空軟なる所なればなり、(森立夫曰、四隅のこと、予が附録中に詳にす、)○再び復胃經を診すべし、其間に大筋の候も自得_レべきなり、右諸所に心を着て察するときは、下に所述の虛實陰陽、及男女年齢等の異別、自分るべし、其大意を云へば、一言あり、曰觀_レ相應、曰知_レ定位_レなり、又恰好を觀、つり合を知とも云べし、相應とは、男女幼兒、壯老肥瘠、及諸般の氣象、病人は其病の新久輕重の屬、其人自然の相應を見合すべきを云なり、定位とは、胸腹上中下、任脈天樞、及諸空所等、各其部位を知定むべきを云なり、此二件を以て工夫するときは、真象假象は、自可_レ分なり、(同上)

○凡按腹專尙_レ左手、右亦非_レ不可、唯使_レ左爲_レ佳、先將_レ左手掌、上齊_レ鳩尾、魚肉當_レ右肋端、掌後側肉、當_レ左肋端、指根肉當_レ中脘、始輕輕按過、漸漸重押、三肉進推、左旋右還、按動無_レ休、不_レ宜_レ少移、良久掌中與_レ腹皮_レ相合摩、其間以_レ似_レ熱非_レ熱、溫潤似_レ汗爲_レ度、如是則、掌下腹裏、滯結之氣、融和解散、莫_レ不_レ猶_レ開_レ雲見_レ日也、唯以_レ久按靜守半時許_レ爲_レ妙、若夫苦手溫和掌、可_レ謂_レ賢者之富貴_レ矣、而此固_レ係_レ于天資、非_レ可_レ強求、何必_レ之乎、苦手溫和掌、見玉樞經、○(秀卷)

○腹を診するならば、病人の右へ回て領へ風不入やうに心付くべし、披露するは惡し、胸を不_レ開くと第一なり、先左の肋下へ手をさしのべ窺て、心を丹田にこめうかひ、右の肋下へ引とり、其より中脘水分、兩天樞天樞の左右の下、氣海丹田中極までも、能々上下浮中沈の九候の心を以てさがし尋ぬべし、其時の手障り、留滯血積筋攣肉起疔瘡の如きあるときは、不平の腹とすべし、(白竹)

○診腹之法、正心端整、容貌舒緩、手貌安靜、最忌時大寒涼、請三爐火、或懷手先試自己之膚、而後令三患人仰臥、安手伸足解帶、暫候其呼吸、而後先摩三潤胸上、以至三腹臍、診其周圍及高下平直、至三胸上、察其腠理之潤枯、皮膚之堅脆、虛里之動、以知三心肺之虛實、三腕脾胃之部、兩脇下肝之候、以至三臍下、元氣之所繫、十二經之根本、診之最要者也、是其大概至其細、詳錄于後云、(無名氏)

△(引、松井本) 凡腹診之法、以得呼吸陰陽和為至要矣、而後診虛里、以候宗氣之虛實、輕手按心下、緩々循兩肋而及脇下、手法輕重得宜、按大腹漸々及臍小腹焉(黃山)

○凡診腹、早且不朝頓時為佳、醫者須坐病者之左、潛心就事、先以食中二指、候虛里、而後自臍中至丹田、循撫三二遍許、安病人之心氣、又為令逆氣下降也、却乃按心下三腕、次少陽、次陽明、次兩脇、次少腹、最後察神關、是其大綱也、診已遍宜摩胸腹一過(臺州)

○腹診は手を平たくして診すべし、不然ときは、病人がしゆつながらるなり、先鳩尾を診し、次に水分それより次第に任脈の通臍下までを診し、任脈の勢を視る、又動あるものには、任脈の本位の動あり、又左右の動氣ありて、其響の應ずる者あり、故に此等の處を、綿密に分たざれば、附方のところ相違あり、故に最初に鳩尾水分、夫より左右積氣の胸骨に入るか入らざるかを診し、それより左右肋骨章門を診す、此れ大法なり、虛里の動は、腹診の終に候ふべし、(東郭)

△(引、松井本) 察腹形宜按撫數回、或沈或浮、以察腹力、及腹之堅軟、又輕々撫下而察皮膚、可

以知虛實也 (東郭)

△(引、松井本) 診腹醫先使神氣寧靜、而以右手掌輕々徐々、按撫鳩尾、承滿、上腕、中腕、天樞及臍、以察其腹皮之緩急、有痞而堅乎和平、全腹脹乎、將不脹乎、痞在上乎、在下乎、小腹痞而左乎右乎、腹如無物、腹皮附着背乎、又靜按中腕而察寒熱浮中沈、又以三指按臍、臍者人身之根本也、臍與腎間之動、診腹之樞要也 (同上)

△(引、松井本) 凡診腹之法用左手、患人男則坐其左、女則坐其右、若不便、反之亦可也、而手掌與五指伸展、平板先停住臍中、察氣之緩急、遷停住虛里、診其動之高低、而徐々左右按過、至兩側脊肉外、如此數次、而至鳩尾、醫手掌魚腹外側、指根三肉、與病者皮膚相親着、而久停住、初輕軟漸重墜、使手掌與患者肌膚相和、而溫融手掌魚肉當肋下、掌側肉當肋上、極按肋骨際、左右排押、而至兩側脊肉外、如此各十數次、以察肋下之堅軟緩、塊之有無隱顯、次至大腹、停住三指密排診尺脈、尺脈者臍上左傍上三寸許處脈動是也、脈之根元一身之動脈、淵源於是、手掌當腹之正中、以察氣之動靜、動氣之有無高低、大絡之拘攣軟緩、任脈之浮漫沈整、而左右排按及兩側脇外籐、如此各數十次、以察塊之有無隱顯、次至臍上、掌肉當臍亦停住、魚腹外側指根三肉、遞推按察以臍之緊實虛軟、臍帶有否、深淺、凸凹、次至小腹、又停住察氣之默躁、力之有無、動之應否浮沈、大絡之急強濡弱任脈之浮見沈伏、而左右排按、及兩側腰腕外、如此各十數次、察塊之有無露伏、若胸膈大小

腹三處、俱ニ手掌ニ難ニ探求ニ者、併齊ニ指頭ニ以察之、復再如レ初、手掌與ニ五指ニ伸展、而觀ニ着病者之皮膚、上從ニ膈中、下至ニ橫骨、左右、中央三行、排按各十數次、每時醫之氣息、與ニ患者氣息ニ照應、以察ニ過不及、而究ニ胸膈之肥瘦、廣窄高低、腹形之廓大隘狹、上低下豐、上豐下低、緩漫緊收、虛弱充實、肉之肥肝瘦削、皮之薄軟厚強、膚之潤澤枯索、熱之淺深、有蒂無蒂、腹之滿脹低減、塊之大小長短、圓扁軟硬、水之有無多少、冷之厚薄漫結ニ是其梗概耳、如ニ其纖細悉盡者、足ニ諸知ニ其證候、審ニ辨其用藥、是診法所ニ以按腹通出ニ於切脈之右ニ也、然其按探押索、自有ニ微妙存者、口可ニ以授、書不可ニ以傳、非ニ敢秘惜ニ也、上文之序次、醫者初診ニ患人ニ之法、其再次、三次者、則唯取其要、而省ニ其他ニ可也、若有ニ不レ解者、則數々診按如レ初診法得レ解而後止 (高階撰)

△(引、松井本)醫之手心熱者、診ニ無熱人、猶有熱、須自知之、以ニ手背ニ察ニ其熱 (東郭)

○病人を仰臥せしめ、兩脚を伸ばさせ、兩手を股の側に付けさせ、醫者其左邊に就き、此其常法を以ていふ病人移動しがたきものは便右の膝頭を、其肩隅にあて、膝を開き、臍下を張り、右臍を其心上に覆安し、消息須臾にして、始めて診按すべし、其次第、先其覆安の手を、徐に左右に移して、虛里の動、及心胸中の煩悸を候ふべし、之を名けて覆手壓按の法といふ、次に、右手の食中無名の三指頭を側だて、上缺盆より次を逐て、左右肋骨の間を細かに探下るべし、之を名けて三指探按之法といふ、此亦胸中の虛實變ずしにても、指頭に碍ものあらば、指を留めて之をまじ、痛や否を問べし、凡上部に凝結するものは、兩乳の急を候ふの法なり上、缺盆までの間、探按して痛堪がたし、又兩の肘肩際をもさぐるべし、痛甚しきは皆血脈凝結するものとす。次に其手を蔽



骨に沿て鳩尾へ下し、一は淺、一は深、心下の虛實を候ふ、遂に其指頭を左右季肋に沿て、章門の邊に至る、却て上腕の邊より、臍下に至るまで、左右中幾行も探按すべし、任脈より始て二行三行、及兩の脇下章門の下行まで幾行も接じ下る次に少腹の左右中も、亦前の如く幾行も按じ、傍脾骨際、氣衝の脈までに及ぼすべし、次に復覆手の法を用ひ、指頭を浮かして、掌側骨に力を用て、却て心下より臍下まで次を逐て壓按し下るべし、是時醫者の身を前がかりにして、微しく一身の力を右手に及ぼし、徐々に腹を壓べし、此れ腹中の動氣を候ふの法なり其間意を用て、其指頭に礙ところの形狀を審にすべし、凡正に按じて痛まざるもの、斜に探りて即痛ものあり、再歸脾艾湯の腹證の如きは是なり淺按せざれば應ぜざるあり、心下臍下の悸の如きは是なり深按せざれば徹せざるあり、腹底の動、及塊の類、及其緩急小大滑濇堅脆寒温までを、始終實着に診して、倉卒に按ずることなかれ、(和久田)○此説必しも從ひがたし、但其中一二の可レ取もあり、仍て姑くこれを存するのみ、

平人腹形

○診腹は、最初に平人の腹の見様を定むるを以て肝要とす、平人の腹と云は、何様ぞといへば、鳩尾より臍まで、指を以て撫ておるすに、真中少しくぼみ、臍少しくぼみて、小腹ふつくりとして、自然と小腹臍下に根力あるを平人の腹とす、此撫てる中に妙あり、夫は修得せざれば知れざることなり、さて末々圖などを立て、様々論ずれども皆誤なり、(玄悦)

○(森立夫引、中虛)凡無病平人の腹を見るに、左の方は、惣體按し力あつて、右よりつよく、右は少

し左よりやはらかなるが良き也、左は肝として木に屬す、木氣は常に發生充實するものなり、然れば左かち右まけるは常とす、左まけて右かつは變とす、病積疝氣一切の邪氣左にあるものは不爲大害、右にあるは、必ず事にのぞみて害をなすものなり、不可不知、

○平人の腹と云は、下ふくらにして、恰も布袋和尚の腹の如く、不弱不虛、内外しつかりとして、陽氣深く温順に、しはざらめかず、につとりして、内に手のこたへありて、氣外へ張り、呼吸に片つりなく、上下次第あるをこそ、平腹とは云べきなり、(白竹)

○腹の上下左右、何物のさほりもなく、靜にしつかりと堅固に、章門天樞の地ふつくりとして、鳩尾の地は透て、丹田氣海の地たしかにして、くもり枕を按すが如くなる、是を平人無病の腹象とす、是を能く知るときは病人の候自ら可なり、(南漢)

○平人之腹如蟬肚、三脘平、謂無動者、是爲胃和、節飲也、又腹皮堅實廓大、或柔軟而無力、 謂胃之兩故壯盛也、即指小腹、無塊及動者、爲無病、 (臺州)

○平人の腹を診し覺ゆれば、病人の腹自ら分るべし、平人の腹形は蟬肚の如く、下腹を以て無病とす、胃氣通利して、腎氣實する故なり、又腹の強弱は、脂膜の多少による、脂膜少きを弱とし、多を強とす、脂膜を以て藏府を養へばなり、仁王の腹の如きを壯實とす、腹を按ずるに、ひつくりと滑なるを好とす、がさつくと不好、日にすかして、うぶげにつや有ものを、血氣盛とす、三脘平なるを

中焦無病とす、按して手を引に、直に腹を實とす、腹の遲を虛とす、腹皮をつまみ、皮と肉と引付て居るを實とす、鼠猫などの如く、皮と肉と離れたるを、血氣衰とす、老人の腹、多は如此なり、(同上)

○平人の腹は、左の方へ少し偏て力あるものなり、意を用ゆべし、(同上)

○總じて人の腹の皮は、上の方にては厚く、下の方にては薄きものなり、(東郭)

△(引、松井本) 凡診腹之法、人有體之肥瘠、氣之虛實、皮膚之潤燥、肚腹之小大、男女小少壯老之異、不可不熟察也、其診詳明陰陽之爲難、陰陽何也、蓋人之腹狀、有二焉、大抵皮膚周密不粗、宗筋端正、細理條長、胃經兩行、隱起作堤、左右均分、下及臍傍、任脈微窪、至臍按之有力、推之不拘攣、小腹充實、肥膩如凝脂、温潤如撫玉、肢肉敦々、血色潔淨、不肥不瘦、清陽布揚、濁陰歸府者、名之曰陽腹、其如是者、形與氣相任、體與象相應、無疾而壽、即是丈夫之腹也、公豐按、嬰兒乳度廣、而腹象橫廣、任中深、而腹小理者、亦其候也、 陰腹撫之緩慢、按之如囊、形狀橫廣、坦々平行、兩行不起筋理不端正、臍邊軟弱、便々無力、摩之如皮薄著手者、是也、但在女子則爲常、而不妨已公豐按、大抵丈夫、陰腹得病、則爲難治、故飲酒過多、或類中之證、屬陰腹者多、經所謂心腎之病、腹滿大是也、經曰太陰之人、少陰之人、太陽之人、少陽之人、陰陽和平之人、皆有血氣多少之別、腹證亦復如此、大長短、厚薄結直緩急、各不同、蓋腹者臟腑之外郭、其稟受不同者、臟腑亦不同、(陽山) 腹象亦因有異也

△(引、松井本)經曰、清陽實四肢、濁陰歸六府、故手足者屬氣而陽也、藏府者屬血而陰也、是以腹候之要、四肢充實、肚腹小理者良、即上所謂陽腹之候、病之人也、公豐按、此平人壯年之腹候也、中年之人、平和溫潤、皺文稀少、臍下實者、亦佳候也

(陽山)

△(引、松井本)經曰、形與氣相任、則壽、不相任、則夭、蓋肥膩之人、氣血充實、皮膚固密、氣象必快活優長、其腹寬大也、是乃形體與氣血相應者、亦無病之人也、公豐按、此條言雖類陰腹之象、形氣

假實之人、體肥而腹象似實者、其氣弱也。此非稟受之實、而飲酒膏粱之所致、陰血凝結、生濕痰、能塞陽氣之運行、使人虛肥也、若此人、或發癰疽、或為下血、癰疽、脚氣、頭暈、中風諸症、或稟受不剛、骨體細小、肌肉輕緩、皮膚薄澤、或腹象屬陰、腹寬大者、是乃陽虛之人也、雖氣色清爽、氣無鬱滯、一失調護、則病至不救焉、或面浮色青、大府每滿、小府帶臭、腹屬陰、部位不正者、經謂之離絕、莖結憂恐喜怒、五臟空虛、血氣離守所致(陽山)

△(引、松井本)瘦人氣急、黑瘦人氣實、氣勝形也、屬陽腹者居多、公豐按、黑瘦人亦有氣弱者、蓋氣血俱不足、津液澀滯榮衛不調、皮膚無滑澤、調理疎而不耐風寒、或腹有動、或食物難消化、或下完穀、或便常秘、溺赤澀者、腹象多屬陰、最為凶候(陽山)

△(引、松井本)夫腹者陰之部位、而以陽氣為良、故貴陽腹、丈夫之腹象、一陰者女子之腹象、即是所見氣象之各別、蓋法天之常也、(同上)

△(引、松井本)少壯之人、上虛下實為常、老人下虛上實為常、然其稟賦素強壯、雖老、腹小理而皺文少、平和溫潤、上下有神氣、應于手者、是天壽而無邪僻之病、又其上也、(同上)

△(引、松井本)臍下軟弱、下焦臍上堅強、積聚氣滯、少人反常者也少人為變、老人為常、臍上軟弱、臍下堅強、老人有壽、少人無妨、(同上)

陰腹陽腹

無病の腹象を知るは、腹部の切要とするところなり、無病の腹に、陰陽二象あり、是幼

老肥瘠、強弱病不病、及腹の小大虛實等を不論、必ず備ふること、乃裡に陰藏陽藏の別あるが如し、凡陽腹は、多小、多實、多陽人、多壯年之人、其象肌肉解利して、如細長、皮膚緻密にしてたるみなく、任脈實して分明に深く窪み、臍の上下左右窪ありて、新開梅花の如く、臍下充實して、宗筋正しきを云、是陽勝於陰之象なり、壯年の陽腹は經肉如馬背一峯立ちて、推に無形、勝れて剛強なるは小石を並べたる如き物あり、是俗に云腕の力瘤の類なり、乳子の陽腹は、横に廣く、是も峯立なり、凡陰腹は多大、多虛、多陰人、多稟弱之人、其象緩漫として、横に廣く如囊、密實なる處少く、任脈も不分、臍の上下無窪、皮たるみて、一の字の形の如きを云、是陰陽平定の象にして、中年以上は可なりと爲べし、然れども老耄に至まで陽腹なるは、壯健の壽相なり、(對時)○南漢引古傳同

氣象之別 凡腹は藏府の外郭にして、其稟受の藏府に不同あれば、氣象亦不同にして、腹象自異なることあり、其大法を云はば、氣質和緩なるは、腹亦和緩なり、佛菩薩の像腹是なり、氣質剛強なるは、腹亦堅實なり、仁王力士の像腹是なり、常人も是に準し知るべし、氣裕なる人は腹亦裕、氣滯の人は、腹亦滯り、氣大は腹大、氣小は腹小、氣質は腹實、氣弱は腹弱、是等の類を以て推すときは、若し相反する者は病なるべし、右は陽腹陰腹の變を云なり、(同上)

壯老

二十歳前後までは、稟弱ものは腹疾多く、任脈不分、部位亦不正、或は勞效精虛も、

此年齢に多ければ、藏府未堅固と可知なり、○中年に至る人の腹象は、壯歳とは大にかはることあり、大小虚實の無可名状、平和温潤にして、皺紋少く、只小腹實するを宜とす、此年齢より別して津液の潤燥に心を付べし、漸老に隨て兩脇軟柔、膈下兩脇曲骨の上は、素空虚の所なれども、壯時は充實して、張て強し、今氣力衰に隨て、岸離れして空虚を現すなり、身重して腹縦軟とゆるやかに脹出、或は垂腴とたれさがる、是皆陽氣衰、陰血勝つの象なり、六十以上に至れば、陰陽俱に衰へ、腹萎弱、食減じ、上中焦は按して、如無力なり、然れども下焦は猶實するを爲宜、若上中焦實するは病なるべし、(同上)

肥瘦

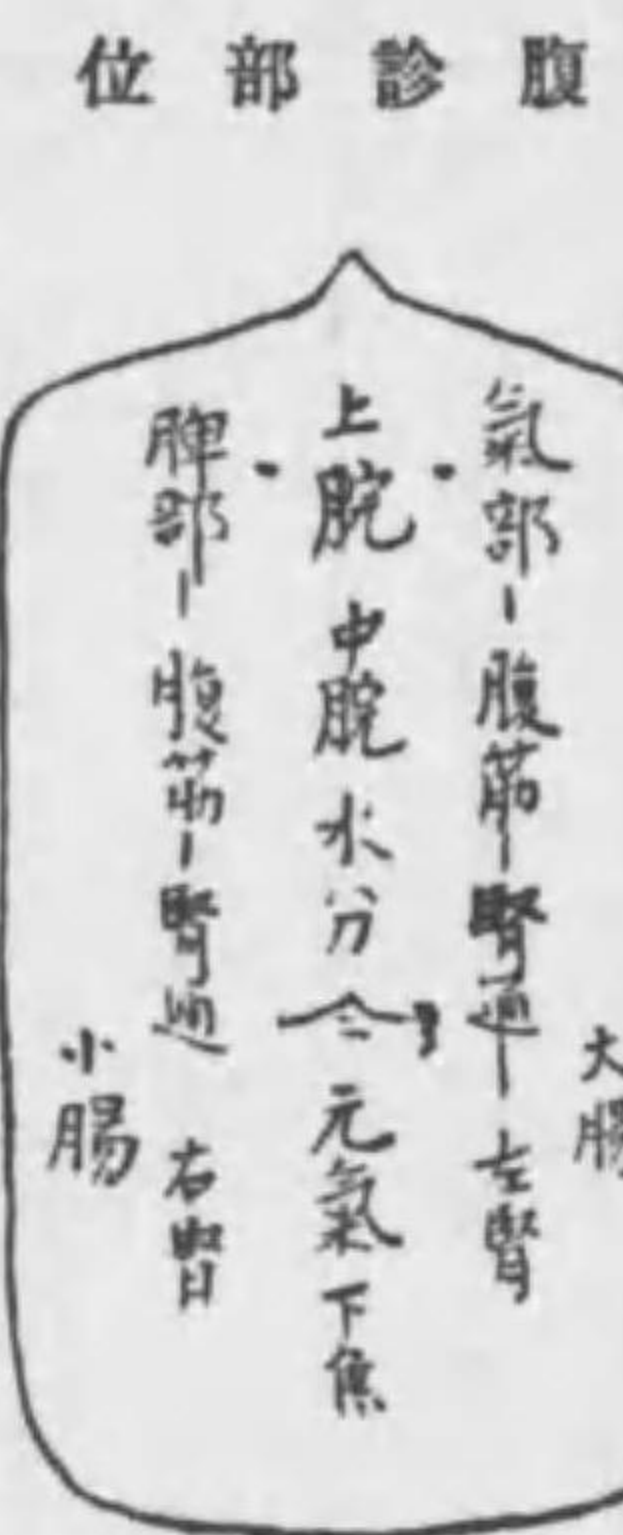
肥瘦の人、氣血充實なるときは、腹部も體に相應して能しまりて寛大なり、若肥満して、形氣二者の中に偏に劣ることあるは病なるべし、○體肥えて氣實腹弱き者あり、腰以下必ず枯瘦すべし、凡肥満の人は、腹にては虚狀見難し、形氣の盛衰、皮膚の潤燥、經肉のしまりを可察、是肝要なり、○體肥えて腹實氣弱き者あり、是稟受の氣血充實するにあらず、陰血凝結し、或は濕痰等に、陽氣運行不健に因て肥ゆるなり、俗ふやげごえと云是なり、○瘦人は丹溪の所謂黑瘦氣實の人に、腹亦堅實にして、餘饒はなしといへども、惡き處もなく陽腹なり、○黑瘦氣弱の人あり、陰腹にしてたるみありて、動氣もあるなり、(同上)

○肥人の腹の形、脅肋よりむつくりと高く、下腹に至るほど大く軟なる腹あり、又心下はすきて下腹大

くなるは皆佳き腹と云、瘦人の腹は、脅肋よりもひく、小腹まで同じ形にて、按ずるに軟なるは佳き腹なり、以上の腹は、皆腹皮厚く、肉に離れずしてうるほひあり、動悸もなきものなり、(南陽)

部位

○凡腹鳩尾より小腹まで、皆脾胃に屬す、こまかにわくれば臍下は腎に屬するなり、是よりこまかにわくるは誤と知るべし、(烏巢)



○氣部脾部は二行通り、大小腸は天樞の外大横の邊なり、(東郭)

同上○今按ずるに此部位水塊妊娠と宜しく位を易ふべし

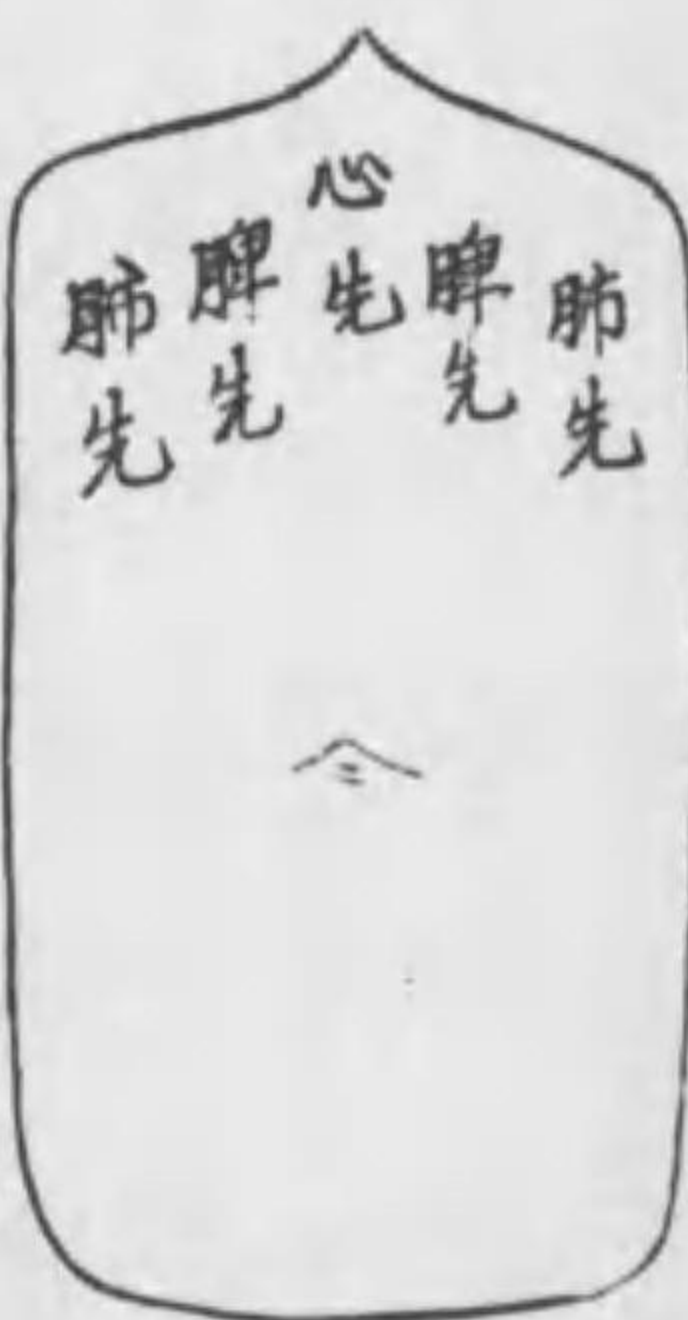




「一二」の診は、即兩脇なり、疫などは、此處から兩乳の間が、別して熱して、掌如燒に覺ゆるなり、此二ヶ所と、虛里の動を見るときは、手掌より指稍にて見るなり、外は食中の二指にて見るなり、虛里は虛陽上冲によりても高さあり、又穀氣上冲にて動ずるもあり、(山田樞庭註) 按有因痰者、有因飲者、〇「三」は、即心下に積氣さしつめたる者には、此處を大指にて強く按して、あとの四指を肋骨の上のせて置く治るなり、〇「四」の部位を按して、ぶつくと水の鳴るは留飲なり飲多くは此に聚るなり、〇「五」こゝに食滯す、強きは三の邊にも及ぶ、此邊より三四の邊にて堅く、石の如きものは食を不節ゆるなり、此は多くは大店の丁稚などにあるものなり、小兒の時疫、或は欬嗽の治せざるは、按腹して如、此は、平胃散でなければ治せぬなり、〇「六」、此邊を按して痛むが、中焦の虛なり、〇「七」、血塊が此邊から九の邊まであるなり、〇「八」、燥屎が此邊に着くものなり、ちよつと按しても痛むなり、七八の處は、即陽明胃なり、此處筋ばるは、建中湯でなければ行かぬなり、〇「九」、即

臍下なり、此處溝の如きは腎虛なり、又綿の如き者あり、難治なり、然れども治するもあり、〇「十」、十一見ずとも大事なきなり、疝で塊あるものは、多くは十一の邊に、棒の如きものあるなり、〇「十二」、十三、即章門なり、此處綿の如くぐさつくは氣虛なり、虛勞瘵疾ともに、腹を按ずるに綿の如き者は不治なり、(靈州)

以上三説互に異同あり、姑く之を併存するのみ、



△(引、松井本)不問左右脾先之膜聚、而其氣結者、食滯也、肺先之膜聚、而其氣結者、食滯也、肺先之膜聚、而其氣結者、痰也、心先之膜聚、而其氣結者、食痰也、
(蘇原)〇別本東郭亦有此圖說、久野部位圖亦同、俱無所據、然以下諸條、有心先脾先等之語、姑舉其概略云、

通腹形證

虛實 凡實とは無病の腹象にして、尋按するに自然に有力を云、有力とは、東垣先生曰、脈貴有神、有神者有力也と、是胃氣の脈を形容せるの語なり、今腹部有力無力の辨、亦神の有無を

觀察すること肝要なり、然れども未熟の人は不能_レ觀_レ之、故に古説に、腹に有力是を水の上に板を泛_レて推に譬たり、蓋裡より如_レ脹の力ありて、蟠根の四邊に不_レ撓こと、如_レ推_二廣板_一にして、重く按ずに却不_二牢固_一の意、和氣自然の力を云、是壯歳の實なり、○凡和とは虚實の名状なし難きを云、譬へば新に綿を入たる衣服を如_レ推にして、無力に似たれども、又裡より如_レ脹の力あるを云、是稟弱及老人婦女の實なり、○凡虚とは、無力を云、譬へば水上に紙を泛_レて推如く、裡にこたへ應ずる物なく、重く按せば、脊骨も可_レ模に似たり、○如_レ虚如_レ實あり、撫て手の留る處、多く推せば表軟にして裡牢く、或は表實して裡虚する類を云なり、○假虚假實あり、病邪胸膈に聚れば、上焦假に實し、邪滯其氣必虚の類中焦は、其勢に逆せられて虚を現はすなり、故に久病數多療治を経たる者と、急卒の病人との腹診は、卒爾に虚實を決定すべからざるなり、○陰實陽虚の腹は、手を浮して表を診するに無力して、手を沈めて裡を診するに反て力あり、陽實陰虚の腹は手を浮して表を診するに力あり、手を沈めて裡を候ふに無力なり、(對時)

○吾門以_二按腹_一爲_二六診之要務_一、何則大概按_二診腹部_一、可_二以辨_二人之強弱_一也、凡按_レ之腹皮厚、腹部廓大、柔而有_レ力、上低下豐、臍凹入、任脈低、兩旁高、無_二塊物_一、無_二動氣_一、此爲_二無病之人_一、爲_レ強、在_二病人_一亦有此數項、爲_レ易治、凡按_レ之腹皮薄、腹部隘狹、無_レ力、或堅硬、上高脹、下低鬆、臍露、任脈高、兩旁低、多_二塊物_一、有_二動氣_一、筋攣急、虚里動高、此爲_レ弱、爲_二病人之腹_一、在_二病中_一、

若有_二此數項_一、爲_レ難治、此其大略也、其餘有_二深微意味_一、但可_二以口傳_一、不可_二以書示_一、非_二敢秘_一也、(卷)

○凡腹裏之癥及疝、上下左右、及中、大小長短、圓扁硬軟、手一按著、可_二直的識_一、邪熱肌熱、可_二辨別_一、腫脹、可_二搜知_一、潤澤枯索、(引、帝本(立之按、胸上滿亦有_二腫理枯澀而不_レ滿堆低減、肥瘦張弛、可_二皆候察_一、虚里可_レ候、動氣上下左右、及中、應_レ掌即覺、妊娠血塊、可_レ試、胸骨之瘦、可_二循而知_一、此按腹之所以不可_レ不必爲_レ而有大益_二于治事_一也、(同上)

○凡腹甚堅硬者難_レ治、甚軟鬆者亦難_レ愈、(同上)

○無病實人の腹は、みなはりてをるうちにやはらかなり、又腹に上は脹りたるやうにあれども、却て腹内はぐはぐとするあり、是はあし、腹位の上きは、腹が次第に下ふくらにして、胸前すつかりとしたるを爲_レ上、女の腹はやはらかにして、よわきが上なり、男の女腹を得るは、虚としるべし、逆なり、女の男腹を得るも逆となす、又腹に凹凸ありて、動氣の位もあつく、(きつく(松井本)見ゆる人あり、是をも貴ばず、さて何病人にても、呼吸の臍下までとどくは可_レ生、大形は呼吸が胸のあたりまでにてつくるものなり、平人も常に呼吸の臍下までとどくやうに可_二修行_一なり、(中虚)

○腹皮の肉脱して薄く、腹の脊に著て、鳩尾兩肋方へ迫り、積のやうなるもの見るゝは、皮膚薄くなりたるゆゑ、藏府が直に手に當るなり、此元氣の虚脱したるなり、(同上)

○統て人の腹のよきと云は、臍より下に力強く、下ふくらにして、鳩尾の下上腕の處柔にし、て動氣静にして、臍の上に満のなきを、能腹と云なり、然に悉く上へ取り上り、臍より下力弱、按之たわいもなく、臍より上は痞強く、左右の肋下までさし痞へ、或は袋の内へ石を入たる如くにして、腹にたるひつみ(松井本、備五)有て、動氣甚強く、或は動氣かいたく、腹にかたつりの有を、變實と云て、悪き腹とはするなり、惣て病身なるもの、腹臍より上へ取り上たるもの多し、今時世間に多く眩暈頭痛或は疝氣の證などあるは、皆是腹のあしき故なり、さて痞類多くても、大事のなきは、中に浮て手に隨て浮沈あるものなり、○大事の痞肋下の條に出せり、左右ともに、大事なけれども、左より右の痞は大事と心得べし、惣て腹の痞胃氣つきざる内は、其痞が強く按じてみさのみ不痛ものぞ、かりそめにも痞を按して痛むものは、胃氣弱きゆゑ、大事のつかへと可思、又一旦の食傷腹痛などにて、手も難付ほど痛をなす事あり、是は又格別のことなり、食毒瘀血など滯てある故に、痛をなすことつよきなり、今此に論ずるところの痛は、内傷長病痛のことなり、唯世間の人に、多く痞の一種あり、十人が七八人までもあるなり、疝氣とのみ言はやるは、皆この一種の痞なり、大方左の臍のわきより、左の肋下へさしこみつかへ、其さしつかへる處には、動氣つよく其動氣のひびき、胸のうちまでさしこみ、必ず左の乳中へひびき、動氣あるものなり、或は股の附根よりさしはるものあり、此痞ある人、臍の廻り筋ばり、或は陰囊へ引はり、或は拳の如きもの、時々浮沈みある故に、人々疝氣

のみと云は誤りなり、(良務)

○凡諸病中腕より臍下まで按して保なく、底まで無力は難治、森立夫曰、三伯同、の症なり、又腹部の簧をかきたる如く筋ばりたるは、虚極の人にありては難治なり、又腹脹満して腹皮急、さらつきて光あるは死症なり、(壽安)

○腹のこけて背へつくに、手あたり少しやはらかなるは苦しからず、板の上にかたびらかけたるやうにかたきは、脾胃の大虚なり、(烏巢)

○めぐらぬ腹に、ぬけたるところあるは、必ずしこつた處あり、山あれば谷あるやうに、ぬけたところありても苦しからず、(同上)

○病に因て、腹象變ずるあり、凡病人陽腹は易治、若陰腹に變ずれば難治、(對時)

○病人の腹を診するに、譬へば病人の腹の右柔に、左拘攣など甚しきを見て、右は苦にならずやと問ふべし、左柔ならば右の方苦しきやと聞くべし、決して右の方心悪く、苦に成ると云ものなり、是も得と見ると、底でひつばつてあるものなり、上から見て宜き處は、結句悪しきなり、心得べし、(東郭)

○總じて大病人を見るに、下地より持かゝりたる疝塊積塊などの、常とは、在處の方角の變じたるは甚だ悪症なり、常は左の方堅かりしが、其宿癰俄に右にうつり、左はぐさくする様になりたるな

ど云ものは、油断すべからず、(同上)

○凡腹皮膩滑而有精彩者、爲血氣盛、其枯燥者爲血虛、若血熱、若皮裏、有水氣也、腹皮堅厚如膈肉、不可挑起者爲實、菲薄而可挑起者、爲血氣衰、又腹中虛軟、如循爛瓜者、爲藏氣衰、(靈州)

○腹の筋あらはれ、一面に板をおす如くに、しまりたる腹は、難治の證にて、後必ず水腫を發して死するもの多し、腹の皮牛皮の如く厚く、肉と一面なるは好き腹にて、大病長病たりとも、療治ありと心得べし、(玄仙)

○日頃病身なるものか、又は程なく長病を煩ふもの、腹は、必ずそろ／＼と、腹の皮うすくなり、肉と皮のへだ／＼になるものなり、此腹の病人ならば、餘りむぞうさにうけ合などして、療治すべからず、事により、めた／＼と大病になることのあるものぞ、心得べし、(同上)

○上腹は大にしてかたく、下腹は力なくやせ、手を以て按せば、たわいもなく、朝夕、胸や脇腹などに動氣ありて、顔色の蒼々たる病人は、病は軽く見えても、實は甚だ大病なり、是虚腹なり、むざとした療治すべからず、(同上○南陽同。)

○腹部の見やうは、呼吸の腹に應ずるを候ふべし、急變のある病人は、呼吸の應じやう穩ならず、次に動悸を候ふべし、腹の一體を候の法は、腹の皮厚く肉ゆつたりとして、肥人の股の如く、皮と肉

とのわからぬを善と云、腹の皮薄く潤なく、肉と皮との離て、幾つと云かずもなく筋の見えるはあし、とす、腹勢を診すると云は、柔ならずこはからず、呼吸の應穩に、何れの處を按じても、痛こたへることのなきを、腹勢のよきとは云なり、(南陽)

○腹の皮が薄く、肉とはなれて背につき、肉は引張て、縫箔屋のわくに掛たる絹の如くになりたるは津液のなき人の腹なり、滯囊吐瀉虚脱の人にあるものなり、極て津液の盡る腹は皮浮き立て羽をむしりたる鳥の骨を撫ぶるが如し、極虚の凶候とす、此手さはりは、自汗つよく死に近き人の手足の肌にもあるものなり、又死人の肌を撫て覺ゆべし、又多産の婦は、腹皮肉にはなれて浮たるは、常態なり、津液を以て見わくべし、心下より痞硬して板を按ずる如くに、指もうけつけぬは、難治多し、然ども甚だ怒りなどして、壽したる人腹も如斯なることあり、是は難治ならず、又皮の離て底の引張て如板、立筋多く見えて、任脈凹になるも惡候にて、勞瘵に多し、引張る故、呼吸せはしく、脈も數なるものなり、(同上)

○古方家にて、腹に拘攣と云ものは、衆筋引しまり聚りたるにて、皮の上よりは、塊の如くに、手にさはりて見ゆるなり、○腹の痞を按ずるに、見えるときもあり、又隠れるときもあり、全く塊もあり、又腸の脂膜切れて浮み出て、按せばたわいもなく、隠れる、皆惡候なり、(同上)

○腹の痞を手にて按すに、水に浮たる物をいろふ如く、手に隨て動く痞あり、是證病人當分見かけよ

しといへども、遂には死證となる、知らずんばあるべからず、(玄仙)

○病の半より、腹形常を變じて脊につき、削りて去りたる如くに、胸肋よりは板の如くになりて、横骨の處にて段々に高くなるは、惡候なり、疫にも痢にも、一二日のうちに如此になること多し、難治とす、動悸などあらはれて、至てあしく見ゆるまで知らずにはすまず、腹候に熱して、預め決断すべし、(南陽)

○腹中壅聚、大如、痛、按之候忽聚散、或雷鳴甚者、果々凝結如三囊中盛三瓦石一狀、大如三鴉卵、按之候轉之必不痛、按之候忽聚散、或雷鳴甚者、果々凝結如三囊中盛三瓦石一狀、大如三鴉卵、按之候轉之必不痛、其位一必在三臍近傍、是爲三陽氣不足所使、宜温之、瘧疾漸輕、而瓦石最重、此症由水多、而惡血稀云々(泰州)

△(引、松井本)腹皮温厚和柔而有力、腹裏無塊無動、上低下豐、是爲三無病平氣焉、若夫反之腹皮薄虛軟、或堅硬有塊有動、上高脹、下低狹、任脈高起、皮肉如離、臍淺露、臍下無力、是爲三病腹、有病則難愈矣 (黄山)

△(引、松井本)陽實陰虛之人、按其腹、外牢堅脹急、而内軟弱無神者、其人必死、禍雖未及、是遊魂行屍之類、形骸獨居、已爲三將死之兆也、或其人素來快活優長者、尙有可治、若心氣鬱結、則又不免矣、或其表和、腹皮薄而有澤按三其中腕、牢且痛者、陰實陽虛之候也、亦爲三凶兆、公豐按此條所載之形狀、皆是屬三厥證者也、或醫施三汗吐下、太過利少愈、後其腹裏有如此者、則係三正氣未復、若邪猶在之所致也、若腹裏不復更爲變、則急證頓發、命期一聞於三前證也(關山)

△(引、松井本)陰實陽虛之腹、按撫之間、表柔軟而裏有力、裏有力者、非硬之謂也、不宜三補藥

用之、易三泥戀也、宜三正氣散或平胃散、是之爲三腹之可者、其尤佳者、則陰陽俱有、力、表裏調和也、陽實陰虛之腹、表有力而裏無力、以爲三惡候、平人且有病況於三既病者乎、往々就死矣、若用三鍼鍼尖之應表分有力、而至三裏部則無力、猶刺三豆腐者、宜三補脾之劑、若血燥者、加三調血之品 (久野)

△(引、松井本)皮肉相離者、候衛氣之虛也、衛氣不足則皮肉相離、猶三老人之腹、皮肉離、則其氣不能三養三肌肉、肌肉不得三養、故皮肉亦離也、衛氣有餘者、皮肉俱厚也、皮肉厚者、則相附着也、皮肉相附、故衛氣亦實也、(同上)

△(引、松井本)拘攣雖同、以分三別其部位一爲要、須三熟習焉、又其拘攣在三皮表、在三皮肉間、在三肉中肉下、均須三細診一一分別 (東郭)

△(引、松井本)腹中如無物、腹皮着背者、脾胃元陽虛也、難治、傷寒時疫之裏證、而如此者、萬無三一生 (東郭)

△(引、松井本)濕痰候、按三撫其皮膚、其狀如三流散條麵、隱然應手者是也、皮膚間如撒三大豆、或如三橫列條麵者、爲三燥痰、此候少三於常人、多三於宮女、婢女、夫痰者生三於鬱熱、其熱煎三熬津液所致也、(久野)

虚里

○古傳云、夫腹を診するの時に、先虚里の動あり否やと診すべし、虚里とは、人の左の乳下三寸程の上に、必ず動することあり、甚しき時は、衣の上までも響くものなり、内經に載する虚里の動脈なき者は必死と云こと明なり、粗工是を不知者甚だ多し、故に虚里の動を、邪氣の動氣なりと心得たるもの多し、可_レ笑の甚なり、夫邪氣の動は、手の内に應じて根を張て動するものなり、虚里動脈は只皮肉の間に於て動搖し、甚軽く應ずるなり、或は又此動脈の甚しき節、診に當り胸さわぎするなど云者あり、是又大に非なり、若胸さわぎする者は、右の乳上乳下動する者可_レ知なり、虚里の動は左にあり、男女皆然り、又曰、虚里の動の高下を試むべし、或は風寒の邪、或は痘瘡、或は食滯などに虚里の動盛なる者は、俄頃の間に昏倒することあり、此症小兒に多きものなり、大人には稀なり、又小兒久泄瀉の後卒倒して死することあり、此を診するに、瀉泄して、胸膈以上に熱あり、及虚里の動氣盛なるときは、内元氣の脱なり、故に如_レ此、(南溪)

△引、松井本)夫人之身以_二胃氣_一爲_レ本、故虚里之動、可_二以辨_一病機之輕重、按_レ之應_レ手、動而不_レ緊緩而不_レ迫者、宗氣積_レ于_二膈中_一也、是爲_レ常、其動洪大彈_レ手、宗氣外泄、上貫_二膈中_一、氣勢及_二缺盆_一者、宗氣外泄也、諸病有_二此候_一者、爲_二死證_一、若虚里數而時絕者、病在_二胃中_一之候、若動結澁者、内

有_二癥瘕_一之候、凡此動大者、與_二絕而不_レ應者_一、俱胃氣絕也、爲_二凶兆_一 (醫山)

○虚里者、胃之大絡、而元氣之表旌、死生之分間也、若其絶而不_レ至者、動而甚者皆死矣、然間有_レ反_二于此_一者、能錯_二綜九候形色_一、而可_二以與_二之言明_一、否則受_二疎率之悔_一云、動甚而肩息短氣者難_レ治、動已絶、九候俱敗者死、不_レ治、動盛而却壽者、質瘦氣寒、而有_二胃火_一之人、動雖_レ盛而不_レ死者、驚傷忿怒過_二酒慾_一之人、動欲_レ絶而不_レ死者、痰飲食積疝氣之人、卒病九候雖_レ絶、而與_二臍間未_レ絶者、亦不_レ死、(無名氏)

動氣三候 淺按便得、深按却不_レ得者、氣虚之候、輕按洪大、重按虚細者、血虚之候、有_レ形而動者積聚之候、沈澁之中、或帶_二一止_一者、寒積也、浮數之中、或帶_二一止_一者、熱積也、○(同上)

○平人は膈中靜なるを佳とす、虚里の動は、寸口人迎趺陽一切脈の宗氣なり、視_レ之不見、按じて漸く動者を吉とす、其動乳下一二三の間に在て、應ずるか不_レ應かを吉とす、胸中の陽氣衰ふるは、其動高く乳を踰て、中府雲門の位に至る、甚者膈中に及び、又右に及ぶ、胸中多_レ氣者死とは、是を云なり、虚勞勞瘵、日を逐て動高きは死す、初より動氣見はれて、後に症を見ず者あり、不_レ久して死す、扁鵲が血脈治すと云は、虚里の動の平なるを以て之を決するなり、胸中の氣は、一切虚里にて候ふなり、(靈州)

△(引、松井本)虚里與_二寸口_一相應、虚里高者、寸口亦高、寸口結者、虚里亦結、(靈州)

○虚里の動せはしく、高く手にあたるは惡證なり、猶更妊者などには甚だ忌ことなり、産後急證發することあり、黃胖病は虚里の動甚だ高し、必ず惡證にあらず、勘辨すべし、虚里の動ばかりにあらず、腹部の動悸は心を付て候ふべし、動悸に變あらば、何病にても油断はならず、急變をなすことあり、小兒は驚を發すること多し、又何か痼疾のある人の動悸は常にかはることあり、四診と參伍すべし、(南陽)

△(引、松井本)乳下其動應衣、其因蓋有二焉、其一因宗氣不固、而大泄于外、此中虚之候也、屬凶徵、可先語之、又陰虛陽盛失所、交飛場鼓舞、而動乎上、宗氣泄於外者、此陰虛之人、亦爲可危、發明云、失血者、痰火者、飲酒過多者、或失志動心火者、或強力而動支體者、或卒驚惕者、或奔怒者、黃胖者、此人雖其動甚、此非宗氣泄而所致也、宜仔細致察、(春長)

動氣通説

△(引、松井本)秘傳云、診腹須先分別邪氣及元氣之動、按之浮而強者、邪氣也、沈而強、勇而圓者元氣也、(秘事)

○古傳曰、腹を候ふに、手に應じ動あるは、大抵邪氣の動と知るべし、或は鳩尾下、或は右の脇、或は左の脇を、手を以て按す時、應じ手動するなり、此動する處、今日有て明日止み、又他の處動す

るか、又動氣すきと止かなどするは、此を邪氣の離たると知べし、此時に至り、元氣を補ふの治法を專とすべし、若又手を以て按す時に、上下ともに性體なきやうに、くさくさと柔に成て、動氣の止は、最早邪氣は離れたりといへども、元氣の脱したる證なり、是必ず不可治、とかく病人の腹を見る時に、上下左右に動搖する邪氣有や否やを候ひ定めて、邪氣手に應ぜば、何れの處にありやと知定て、さて重て腹を見る時に、其邪氣處を替へたるか、但退きたるか、又は彌動氣つよくなりたるかと、心に徹して、覺え定むべし、退て動氣の止は、勿論、邪氣の離れたるなり、左の動右へ易るか、右の動左へ易るかするも、邪氣の離れたるなり、此邪氣の離に依て、死生吉凶を定むるなり、(南溪)

○(森立夫引、中虚)病人の動氣、一時に沈伏するものあり、是亦榮して勿以死與期、或は邪氣消除し、或は元氣快復して、つひに動氣いづるものなり、

(立夫曰、按ずるにこの動氣は家傳所謂腎間の動氣のことなり、南溪の邪氣の動とは自ら別なり、)腹部の動、無病人は、あるかなきかと云位のものなり、知兼るものと可覺、どかくとする動氣の易知は爲凶、動氣も平人の脈候と同じ、一息の間に、四動より四動半乃至五動を爲吉、一息の中二動、又は二動半、至て遅も、此元陽の虚なり、(森立夫家傳)附子肉桂を用る場なり、若其人虚にあらざれば、腫氣の患あるべし、(中虚)

○(森立夫引、中虛)呼吸一息に四動、四動半、乃至五動を、陰陽平和无病の平人とす、病といへども害なし、又外形無病なりといへども、かの道氣の動に、太過不及あるは、病者は必ず危く、無恙ものも必ず疾む、又云、四動より五動までは、无病平人とすといへども、皮膚の厚薄、動氣の浮沈滑澹有力無力について、寒熱虚實あるべし、

○(同上)動氣一息二動三動半まで、元陽の虚とす、腫氣出来るものなり、可付心、

○(同上)虚人の動氣なきものは、命不久、細數も亦危しといへども、有力は可治、たゞ此腎間の動氣について心をつけよ、死裏に求生、生前に断死の妙法たり、其中たゞ須有治法、診脈の理と同じく工夫を加へよ、

○(同上)動氣一息五、六度は風邪、七度は病危し、八度は難治、

○(同上)春夏は陽氣浮て動氣數也、腹もへるものなり、秋冬は陽氣沈んで動氣も沈伏し、腹もふつくりとなる者なり、是造化の常なり、反之者を爲逆、

○(同上)動氣病氣を見定て、いかやうに病むといふとも、動氣を第一とし、動氣の太過不及と平和とによつて、病の難易を論せよ、

○幾萬人診腹するに、先は右に動氣はなきものなり、千萬人の中、天性うまれつき右に動氣ある人は不苦、是は反關脈と同じことなり、其中動氣ありて無害は、急なる傷食痰喘息傷寒の表證に、

右に動氣あるものなり、是變見と云ふものにて、傷寒裏證にはなきなり、右の四證、動氣即時右にありといへども、翌日診するときは、左に位するものなり、しかるに、今日も、明日も、右に動氣あるは、あしきこと可知、さて平人の動氣に、極虚人と、大實人と、動氣難知ものなり、子細は極虚人は元氣虚脱して、動氣出現するに無力、動氣ありといへども知り難し、大實人は、皮膚堅厚にて、動氣沈壓して難知なり、この兩者は、脈狀形色を察して、吉凶を決すべし、(中虛)

○動氣沈伏して不見ものあり、殊に婦人痞氣疝氣などに如此ことあり、是邪氣の爲に沈伏すると見えたり、(同上)

○動氣上腕あたり、左肋の邊、胃經通りに數々見るは、腎中の火散亂なり、陽虚としるべし、平生氣のなやみ、又怒つよき人、諸事苦勞する人に多し、(同上)

○婦人奉公人などに情欲不遂ものは、動氣數ならずして、却て沈で遅きものなり、(同上)

○動氣左に在は妨なし、臍下より右について動氣の升者は難治、右に動氣盛なるときは、左も彌盛なり、臍中動甚者は、火動の症なり、(善安)○要庭演して曰、左は陽、右は陰なるゆゑに、陽分の左は治しやすく、陰分の右は治しがたし、痞積も吉凶部位其理同じ

△(引、松井本)診右乳下、右者屬陰、雖其動微、陰虛火動、肌肉羸瘦者、或産後血暈者、或患黃胖者、往々有動應手者、(卷長)

○腹に動氣あるものは、積あるなり、虚里の動の外、動はみな病なり、病甚しきは、あらはるゝ病甚

しからずといへども、能くうかゞへばあるものなり、(烏巢)

○動氣右へまはつて強く、心下鳩尾までも動氣強きは、眞陰絶して、陽火の衝逆甚しき故なり、必ず死す、(玄悦)

○動氣うたざる腹あり、是は陽氣なきに似たれども、太過の腹合にして、中に實すれば、外に動氣をかくす腹なり、又無淫の人、或は頓死するものに動のかくる、ことあるなり、(白竹)

○動氣不足の者あり悪候なり、氣口と俱に微細なるは最も悪し、(同上)

○動氣鳩尾へ升てうつことあり、是氣口の懸絶の脈の如し、根絶て火のたちぎえたる意なり、必ず死すそれともに臍中へかよひて動あることあり、是は鳩尾と神闕とを按じて知る、手法に口訣あり、(同上)

○動氣左の天樞にあるは尋常なり、右へまはりて居るは、脾胃と云、痰と云、溼と云ふ、うかゞひあれども、死症に及ぶときも、亦右の天樞へ動氣まはるなり、右は命門火旺之分なれば、水盡て火亢の表なり、(同上)

○大病後に、腹中これと云疑も手に當らずして、臍の上下より鳩尾まで動あるは、元氣衰、相火の散亂するなり、死證に屬す、(淺井)

△(引、松井本)動氣者、一息四動、沈而圓且勇者、爲佳、根本之氣堅強、而上部之動沈且強者、太過也、根本之氣和、動氣浮洪、而上部之動緊強者、不足也、根本之動氣、和而堅強、而上部之動氣、

強而無勇者、亦太過之候也、如是者元氣不足也、是陰水減、邪氣燦三元氣、而元氣上汎故也、(秘事)

○肝腎の虛火亢りて、虛里動にて診候するなどは、所謂靴を隔て、痒を搔と云ふものなり、水分の充るを以て診すべし、(東郭○水分動のこと、後に自ら條あり、相參すべし、)

△(引、松井本)動氣一旦亢者、異于平生之動氣、腹底隱々難知者實也、爲佳、氣質厚實者、其動難應手也、(東郭)

△(同上)凡心下脇下動氣在者、氣與水火相搏而煽動也、氣逆則生火、火生則引水、水聚則又釀火、以相煽動、故動築也、(同上)

○總て腹部に動氣しまらぬは恐るべし、浮散の動氣は虛に屬す、亢實の動氣は、溼熱に屬す、微細の動氣は、陽虛に屬す、總て腹中の動氣を知ることが得れば、治術の室に入なり、病人動氣腹中になきものは、必ず腹中に入てあり、甚危症なり、動は常人臍中にあり、水分に出店あり、病甚しきものは、一寸づゝ上る、危き者は胸中へ冲るなり、(同上)

○根元の動は、平人臍中にむつくりとして、亢らず静すぎず、常に安置す、又水分に其餘光あるものなり、此二處動なき者は危し、(同上)

○脈に熱不見して外候に熱症あり、寒劑を投ずるに疑惑することあり、(松井本には腹熱不見外候有熱證欲投寒劑、云々)其時は水分臍等の動亢は熱なり、又手脈盛にして、外候に寒症あり、疑しくば、

動氣の手脈より静なるは、温薬を用べし、(同上)

△(引、松井本)腹部第二行之動、近迫_レ於_二任脈_一者、可_レ爲_二三行之動_一看_レ唯水分之動、與_二三行之動_一、響_レ於_二任脈_一者、可_レ能辨_二別其真假_一、(同上)

○胸に動ありて、下に動の根なきものは必死す、(同上○衆疾復診)

○左右及臍下の動氣高者、上へ動氣上る者必死、此にて生死を決するなり、賁脈の動氣は小腹より起るなり、(同上)

○三腕凝滯、築々動悸、按_レ之痛者宿食也、輕者消_二導之_一、重者下_レ之、中腕盤結、動悸彈指者、食毒也、久病不_レ食、中腕及臍左傍動高者、胃氣欲_レ絶也、動在_二臍上_一者、腎氣上逆也、已及_レ於_レ此、非_レ桂枝所_レ能及_レ、宜_レ速用_二附子_一又聞_レ田氏用_二丹地黃_一、能得_レ效、從_レ症宜_レ用(森立夫曰、丹地黃、蓋謂_二牡丹皮地黃_一)在_二臍左傍_一者惡血也、在_二臍中_一者爲_二至劇_一、兼_レ之爲_レ病者難_レ治、若餘症總順者則猶可_レ及、動在_二心下及三腕之左傍_一、而細數築々然、上及_二左肋_一者、虻蟲也、(泰州)

○人陰氣衰れば、陽氣亢ぶりて、動氣鳩尾の下までさし上るものぞ、故に陰虛火動之症に、動氣不_レ亢もの一人もなし、臍胃虛の診も、中氣弱き故に、運行たらずして、邪氣集りて、臍の廻り、臍の上に動氣つよきものなり、(良務)

○動氣の上を手を以て按すに、病甚しきものは、是胃氣の弱より起ることなり、必ず大事をなすべし

痞積も其通なり、(葉庭○玄仙同、又曰、此に瀉がつくと、其死三日を出ず、又南陽曰、(長病の人、動悸へ手をあてても痛堪がたきは極虛なり、難治なり、)

○諸病胸腹の動つよきものは、灸なり難し、損ありて益なし、(同上)

○腹に陽虛の動あり、陰虛の動あり、此二の見わけは、腹を按ずるに、第一腹のよわく動氣も弱く、右の偏ことさら腹の弱き者を陽虛の腹と云なり、又陰虛の腹は、そうたい腹に潤なく、燥て動氣も、虚勞の脈の細數になるが如く、動氣も亦細數にして、せはしくうつものなり、左の偏とりわけ潤少くなつて、之をなづるに醫の指稍へごそくするあんばいあり、是を陰虛の腹と云、(同上)

○すべて動氣の診に心得あり、一のこゝろ得は、動氣に潤のあるとなきとの二を候ひ知ること、是心得なり、動氣をつく如くにびんく指をはじき、ひゞき強き動氣あり、是やがて元氣盡んとして邪氣主人となる徴なり、必死の徴と心得べし、又動氣つよけれども、動氣に全體つやありてゆるみのあるは、縱其病人大病なりとも治療の場合あるものなり、必死に至るとも、治療の間はありと知べし、手の六脈を診するに、意思欣々不可_二名狀_一と云は、胃氣の緩脈を云なり、其緩脈も潤あるの脈なり、動氣の候ひかたも、此理を以て推して知べし、(同上)

○すべて動氣の善悪を知る捷徑は、脈理を以て動氣の上に推て考へる、是良法なり、(同上)

○病人脈はよきやうにして死する者亦多し、元氣竭たる故なり、さるに因て、何ほど脈悪にても、腹の動氣胃氣あつて潤へば、存の外死せざるものも亦多し、宜く精察すべし、(同上)

(森立夫曰、家傳所云探道氣中之病氣、探病氣中之道氣、而以決生死、定吉凶是也、)

○何ほど脈よくても、急變あるは、動氣に必ず子細あることなれば、長病大病に臨ては、動氣の善惡を察すること肝要なり、(玄仙)

○すべて傷寒時疫外邪の類は、腹診あてになりがたきものなり、動氣いかほどよくても、急にとりつめ死するもの多し、動氣のあてになると云は、虚勞勞效を首として、其外長病病身者の診察に肝要なりと知るべし、(要庭)

○動氣を以て、それらの虚實を知る法、動氣の上へ手を下し按すに、はりあひもなく、軟なるは、是虚なり、此に反して按すころ、ひつくりと強きは實なり、(同上)

○すべて、腹に動氣の強き病人、ふと瀉がついたことならば、難治の症と心得、その旨を病家へことはり云て療治すべし、(玄仙)

△(引、松井本)有蛔虫處、動氣啄々、動中又動、熱按之、心下以下及臍左傍處、有細塊、(蘇亭)

△(同上)宮女無虚候、而臍下之動上逆者、是淫慾之火也、(蘇原)

△(同上)動氣有無根者、診之臍之上下左右、一處有動、而臍中無動、是曰無根動氣、爲死證、以三元氣分散也、診腹法、以臍中之動氣爲君火、(久野)

胸 上 虛里動 已見前

診 肺 刺禁論曰、鬲膈之上、內有父母者、心肺之謂也、故胸者肺之候云、左右膈下膚潤、

舉按有力者、肺氣充實之候、輕摩胸上、腠理枯澀而不密者、肺虚之候、左右膈下柔虛、隨手陷者、胃氣下陷、肺氣大虚之候、大率其人短息、(無名氏)

○胸中肌肉實者、爲心肺實、虚則肉脫吐露肋骨、胸面塗々生光者、爲真陽浮、如小兒脾勞、大人虚勞勞瘵等、見此症者、必難治、疊服肋骨見而如此者、最難治、(臺州)

○胸上光を生じ如鏡なるは、真陽外に浮なり、此症必ず死す、老人の中風に多し、將生光者は、如鏡に至るを待て死するなり、(同上)

△(引、松井本)中府雲門之近傍、内陷者肺衰也、爲惡候、(同上)

△(同上)膈中大動、痰火壅盛、滯氣火鬱、或爲吐衄之兆、其人必皮膚壯熱、(陽山)

心 下

診 心 本藏篇曰、無惛弱者、心高云々、九鍼十二原篇曰、膏之原出於鳩尾、胃之原出於中脘、云々、故診心者、必候鳩尾云、輕按有力而無動氣者、心堅之候、輕按有動氣、重按其動有根者

心虛之候、手下跳動、重手却無根者、觸物驚心之候、是不得藥而心鎮則自復、心下動氣、牽三臍間者、心腎兼虛、心下有動氣、身自如搖者、心神衰乏之候、心下有積聚、不動者、屬痰飲、連其右脇無形者、屬食、其動者虫積聚之類、一切久病、周腹柔虛、痞塊卒衝心下者、不治之候、一切痛在三部者、動氣乍見心下、或心痛如刺、呃逆嘔噦者、難治之候、如脚氣攻心之類、(無名氏)

△(引、松井本) 轔陷陷者、心之城郭惡故也、其人由平生驚悸也、(松井)

○上戸の腹、鳩尾さき板の如く、左右最も甚しきは、此酒氣盛にして、血を凝滯するゆゑなり、如此は、五三年に黒血を吐することあり、(白竹)

○鳩尾へ岐骨をとりまぜて、磯へ波の打よせたる様に、肉皮あつまるも惡候なり、(同上)

○(森立夫引、中虛) 腹になにもなく、左右或は一方よりも胸へとり上げて、或は痛み、或は不痛もの、鳩尾はづれに數なる動氣有、是心の痛なり、不可行針、死證なり、(立夫曰、こゝに心の痛なりといふ、は心臓の破れと云意なり、真心痛の處にあらず、)

○藥と病と不相應のときは、病人鳩尾さき肋の方へつかへ、息だはしく、唇口乾燥し、中脘に動氣ありて、不食するものなり、是藥氣上部に泥滯して下行せざるゆゑなり、(中虛)

○動氣鳩尾中脘にあたり、閃々者、不治、相火散亂也、何病人にても必死としる、然れども傷食霍亂

喘息に、上脘鳩尾に動氣あるは妨なし、又無病の人の常に鳩尾に動氣ありて、腹の脊に着く人は、必ず狂亂するものなり、中虛先生二三人も診試するを告たり、(同上)

○(森立夫引、中虛) 無病の人、平生剛火心を犯して、鳩尾に動ある者は、狐につかる者なり、(同上)

○鳩尾へすきと昇て、臍下にべつたりとなりたるは死症なり、(東郭)

△(引、松井本) 相家云、法令廣者、其人爲衆所推戴之佳相也、視患勞瘵者之肋骨、亦有此理、凡鳩尾前如斯者、佳也、人如斯狹者、多患勞瘵也、(同上)

○腎間の動氣下に盡ぬれば上へ昇り、鳩尾の下に、電光の如くびか／＼と響應することあり、其死三日を出ず、大凶兆なり、(藥庭)

○心下の真中に、細動悸ありて、鳩尾へうちのぼる人は、快寢することならず、腹氣上へばかり引あげる故なり、(南陽)

○虫積の候は心下にあり、内がやはらかにて、むつくりと高く、手をあて、みれば、どこともなく、脹るやうにて脹るにもあらず、掌の下に凝るかと思氣味あるものなり、此腹の人は、虫積の外候備るものなり、(同上)

○上脘より傍へ少しの間痞あるものは、食進むとも、飲食の後、必支問するものなり、又上脘の邊より、左右へ廣く痞たるは、食味なきものなり、右に痞るは食滯なり、左に痞るは疝なり、(壽安)

（森立夫曰三伯同）

○痞積腹のまん中にさしこみたるは、食がならぬものぞ、左右へさしこみたるは、食にかまひなし、
（烏巢）

○下より上へおぼえあつてさしこむは、疝氣なり、おぼえなしにさしこむは、肝積なり、（同上）

△（引、松井本）右脇下凝結者、食鬱也、以三大指按之、痛且鬱者、上焦有邪也、左脇下強按之痛者、濕也、或疝瘡、或淋、或痔、或陰癰也、（東洋）

○心下より臍上まで、惣體に靡に皮を著せたる如きもの、中氣の虚なり、虚脹等發する前、皆如是、必竟内よりはる氣の弱り、陽氣の乏なり、（東郭）

中 脘

○脾胃の虚實を候ふは、先上脘中脘下脘の所在を候ふなり、其中最も中脘を候ふなり、指を以て中脘を撫るに、なれあひて、臍もなれあひて、指を以て中脘を按すに、自然と根力あり、最も有潤ことなり、是脾胃の實なり、積聚食滯あるものは、是もなでみるに、至て堅く、根力ありて潤なく、自然と留るなり、積實の類にて消導すへし、按すに如泥くつ／＼として、无力無潤は、是胃中元氣の不足なれば、人參白朮の類にて、脾胃を補ふべし、（支悅）

○（森立夫引、中虚）中脘に有動氣、築々として、總躰の腹よはきは、是脾胃の怯弱と知るへし、中脘に動氣かすかに、有か無かとおもふほどにて、しかも之を按して根に力有て、中脘の左右いかにも平らかなるは、是脾胃強實の人と知るべし、

○（同上）中脘は飲食を腐熟して、後天の氣なり、先天の相火元氣を養ふ處なり、しかれば、飽滿して相火充るときは、元氣を害すること、火に薪をそふるが如し、

○（同上）脾胃虚は、中脘より以下、臍のあたりまで、任脈通りに、箸を伏せたる如く、筋立ものなり、難治なり、中焦を補ふ藥なり、

○上中下三脘、指を以て撫るに、滯らず平者は、胃中宿滯なしとす、胃平なるなり、按之中脘痞硬する者、石のやうになるではなく、唯つかへ硬くなりてある、是を飲癰とす、按するにぐれりとするなり、（秦州）

○脾部塞り、中脘水分に動あり、又脾塞り、水分に動ありても、中脘に動なきは、食にあらざ、（東郭）
○中脘を按ずるに、底空しくして井の如くなるは必死、（白竹）

○中脘任脈通りに、動氣春米の如くなるは、脾胃の虚としる、此症に針刺すると、大害あり、（中虚）
○中脘積連二右脇下、或連三臍上、按之有痛者、爲三食積、三脘絞脹、按之無痛者、脾胃之虚、用補脾之藥、漸治者、是其症也、○（無名氏）

△(引、松井本)胃熱候、中脘處、按之任脈行、有動悸、其應廣者是也、臍上至胸其動細者、任脈之動也、胃寒候、中脘無力、弱而無動氣也、大病而中脘空虛者、發嘔逆也、病不甚重而其中脘弱、則須問既下痢乎、或大吐乎、吐瀉則其力弱也、診腹之要、診寒熱虛實第一矣、中脘有動者、用白朮、內氣有餘、則不可用、(久野)

水分

診脾胃

四十四難曰、太倉下口爲幽門、大腸小腸會爲闕門云々、是皆傳送幽陰、分闕化物、輸當臍下一二寸之分、名曰下脘水分、胃氣之所行也、故此分間診脾胃之盛衰云、臍上充實按之有力者、脾胃健實之候、臍上柔虛、按之無力者、脾胃虛損之候、其人多瀉泄臍上虛滿如按之囊水者、胃氣下陷、其人小便不利

○水分は陰陽分別之處なれば、表裏の開闔、寒熱往來の機、みな水分にあることなり、此處そこにこだほりある人は、前久痢病を患たることあるぞ、又今日に至りても痢を病む人には、必ず水分こだほること疑なし、水穀分利の處なれば、即水分とこそ名けたれ、(白竹)

○心下の水氣を見るは、水分の動を指にて診し、指を擧るときの模様を氣を付べし、(東郭)

○水分の動と云者は、何故に動ずるかなれば、所謂命門の相火炎上と云者が、きつとちがひないこと

なり、命門の火充ると、腎氣弱くなる、乃腎氣丸はこの動を鎮るものなり、(同上)

△(引、松井本)水分有動者、爲肝腎之虛火、肝腎相通故也、宜三黃加石、或麥門加石膏、黃連之劑、則其動可靜也、治水分之動有二、地黄、薯蕷、牡丹皮之類、無效者、是世俗所謂臍帶絕也、其動築々起於臍底、臍隨、動有此候者多不治、是其一也、實證者、其動在二外表、而不在此裏底、是其二也、此皆微妙深遠、宜細察之、若草々診過、則不易分別也、又有宜茯苓者、其動散漫、與建中湯之拘攣同狀、昔者有二官醫、能診臍中之動、其說云、欲知有病之動、宜先診無病之人而知之焉、無病而腎氣強者、重按之尙如無動、極虛者、其動浮泛易知、其狀不齊、能熱察於此、則可知病者之死期也、今診水分之動亦然矣、察其不齊者、在左、則其左脈亦如レ此、然病人能堪行歩、其脈如レ此、而無害者、或有焉、(東郭)

△(引、松井本)水分之動亢、而有不當與地黃劑者、察此動有法、又更須參諸證、眼色脈舌、夫天稟厚強之人、偶下元虛、而虛火動者、罹疫症、醫之耳目、專在於天稟之強厚、而不察下元之虛、用大柴胡湯等、則頽然委頓、是誤也、所謂視色不以目、聽聲不以耳、是也、(同上)

○邪氣退て後、邪氣の離といふこと下脘水分の地細く筋張たる様に、肉と皮と別れたるが如にして、按じて手を上げれば、皮手に著て擧るが如く、肌膚乾きて潤なきは、老人なれば、十日の内外に必死と可レ知、小兒の腹如レ此なるは、三五日を不過して死なり、(南溪)

○水分の動に異風あるは、氣を勞する候なり、房に入るも小腸しまり水分動ず、その動ずること勞心よりはひどくなり、遺精の診も同じ、或曰、水分の左或は左右、或は右脱する者は、必ず遺精をなす、水分ぬけて、臍の下弱くして遺精をなすもあり、(同上)

○水分の動、だんく上へ上り、本の處にはかけ計は死に近しとす、又本の處にかけ有て、動氣氣海へ引つさうつも亦死證なり、(同上)

○諸病水分の動氣つよくするときは、先其動氣を靜かにするに非ざれば、其病治し難し、其動をしづむるは、生地黃より善なるはなし、すべて動氣表に浮ものは虚に屬す、腹の底に沈は實に屬す、(靈應)
○水分の動氣を診するに、常の動氣よりは、なんぞ異なることありてむらにうつは、畢竟其人氣に苦勞するより起れる處の病なり、と知べし、肝鬱の處劑に心を付べし、すべて勞心甚しきものは、水分の動充り、或は動氣につまづく氣味あり、是を勞心の動と云、(同上)

(水分は、心の空として、心を含むる處なり、(森立夫)引中虚)

△(引、松井本)臍上水分有動者、將發脚氣腫滿、(淺井)

臍 中

△(引、松井本)人之壽相、相臍可也、疾之淺深、按臍可也、故診腹之要、以臍爲先、蓋人

身之有臍、猶天之有北辰也、故名曰天樞、又名曰神闕、傳曰、天樞之上、天氣主之、天樞之下、地氣主之、氣交之分、人氣從之、三才之所統、診之爲要、豈不亦宜乎、夫臍之凹也、是神氣之穴、爲保生之根、環中幽深、輪廓平整、徐々按之有力、其氣應手者、內有神氣之守也、公豐按、按之有力者、與按之平堅者、相似而不同、宜熱察也、平堅者、或結實、或痛者、有燥屎之候、若軟柔如綿、按之其氣不應者、其守失、常也、突出而凸、氣勢在外者、其守不固也、至于弱如泥者、命期必不遠、何得永保天年乎、公豐按、若出者、是必腹脹腹脹、石積之所致、雖未見其變、可知其疾性、不難治也、(陽山)

△(引、松井本)古人以臍中之動、爲君火之應、其平穩也、可候氣、不可候動、惟遭其變而後可候動、而知淺深也、稟氣虛弱之人、或不知節齋、徇情縱慾、則臍中有動者引日是二氣不平、真陰不足之候也、腎氣有餘之人、或愛精慎慾、則施泄、亦唯翌日有動已矣、難經謂當臍有動氣、則脾氣不足者也、臍立中焦之候、亦不可不審也、公豐按、傷寒邪在陽明者、與平人吃傷飲食者、或臍中有動、狂厥亦或動也、(陽山)

診 腎 腎間之動氣者、密排右之三指、
左之三指、以安臍間、和緩有力、一息二至、遠臍充實者、腎氣之足也、一息五六至屬熱、手下虛冷、其動沈微者、命門之大虛也、手下熱燥不潤、其動細數、上支中腕者、陰虛之動也、有積聚之人、或有寸口不細數、而診決于此者、宜詳審焉、按之分散者、一止者、原氣虛敗之候、吐血欬血動甚而溢中腕者不治、雖愈而復發、一切卒病、諸脈雖絕而臍溫、其

動未絶者有_レ避、(無名氏)

○臍の中深く、動氣大底に在て、氣口の脈と同位なるは、實なり、臍淺くして亦浮くやうなるは、根の絶ちはなる、虚なり、(白竹)

○凡諸病ともに神關の脈を見るべし、實證は指を強く按して見れば、脈ふはつかず底にしつくりと小さくして應ずるものなり、攻下の劑を與ふること、此脈にて可_レ考、此脈宜きは、大抵の下劑を與へても、格別のことなし、虚人は浮んでふはくとするなり、實人と相反す、神關の脈、水分の動、氣口の脈、皆診ひ様同じことなり、指の腹にて診するなり、水分の動も、診ねばならず、(東郭)

○診腹先臍を診すべし、臍中按じてしつかりと有力は無病の人なり、按じて無力は、難治の症なり、按_レ之無力、如_レ入_三指乾泥_一者難_レ治、(壽安)

(森立夫曰三伯同)

○稟虚の人、房に入るときは、二三日臍中に動氣あり、腎氣有餘の人は、翌日まで動氣あるもの間あり、(同上)

(森立夫曰三伯同)

○腹の肝心のめつけどころは、臍のぬけるとぬけぬとて、吉凶があるなり、ぬくると云は、臍のわきの氣がぬけて、臍が離れてつまゝるゝやうになる、臍のまはりだが、手のはいるやうにある、かうなれ

ば、間もなく死ぬるものなり、臍のまはりこりてかたきも、脾胃の虚なり、ぬけたは勿論、ぬけずかたからず、大抵に氣のあるがよいぞ、(烏巢)

○臍を按じて、中へくゝり入て、上皮ばかり動きて、下の不動はよき臍なり、臍の底まで按じて動くはあし、常に臍にくゝりある人はあれども、中のしまりなく、くろくゝとするもの多し、しまりたること、菓の帯の如くなるべし、(中虛)

○臍のさるゝは不治、しかし、わきへ引て見よ、落ればかたよるものぞ、兩方とも落るものではないぞ、片々落るものなり、(白竹)

○臍を上より下へ按して見、下より上へ按して見、自_レ左右へ自_レ右左へ按して見るに、常は臍はどちらへも不_レ動、然ども氣分弱きことあれば、片一方よわきがでるなり、自_レ左右へ按せば、右の方へ行易きは、左の臍の切れたぞ、又自_レ右左へ按して、左の方へ行易きは、右の臍の切れたぞ、是を臍切と云ぞ、上下も此例なり、(南溪)

○元氣の虚實を候ふは臍にあり、臍に手をあて推見るに、こたへのなき臍あり、是元氣の虚なり、表を推ても裡でも力あるは、元氣の實なり、如_レ臍を推て力ある内に凝て堅き物あるは、力のあるには非ず、是は氣合のふさがる故なり、其症は大病後にあることなり、或は痼病などに別て臍の凝あるものなり、夫は實とは云はれず、病なり、かりそめな病氣にても、積聚の類あれば、臍が凝りたが

るものなり、氣塞り結ばれるゆゑなり、時によりて聚るも、其邪去るときは臍の凝ることもなくなるなり、併し大病後に凝るは悪なり、表を候ひて裡まで推ても力なきは、元氣の不足なり、(同上)

○臍者、通_二五臟_一而眞神往來之門なり、故名_三之神關_一、則對_二當子_一、腎如_二南北極_一、是也、凡臍者、深大而堅固、左右上下、挑_レ之不動、輪廓約束者、是爲_二眞神安全_一、倘有_二大病_一猶不_レ治、但暴疾非_二此例_一、(臺州)

○平人の臍はしつかりとして、上下左右より推せども動かず、是氣血充溢する故なり、高年になると自然と動くやうなるなり、是精氣の衰る故なり、又臍の廻りに煙管のがんくび程の牢き輪郭あり、此輪郭の剛柔盈蝕に因て、虚實を辨ずるなり、さて腎氣盛なるものは、輪郭剛盈なり、壯實とす、無病の人とす、たとへ大病たりとも、無難に治するなり、又輪郭蝕してあるか、或は無あり、是臍のさるゝなり、氣血耗虚の所致なり、病人は死不_レ遠と覺悟すべし、又無病の人たりとも、是有るものは命不_レ長と思へし、故に神關の強弱、輪郭の盈蝕は腎氣の虚實によるなり、又古より臍は十四椎に對すといへり、彌神關の本、腎の藏にかゝること知べし、是以大病の死生を決するは、神關を的とするなり、別して水腫脹滿等の證は、腹皮引はりて居る故、それにつれて、神關もひつゝるなり、是以臍が動くやら、動かぬやら、知れぬなり、然ば何を以て斷ずるぞと云に、かの輪郭の有無にて決するなり、然るときは、萬不_レ失_一なり、且臍は李を容るゝを好とすと云へり、壽相とす又

小而淺者は天相とす、是人相家の一看法なり、心得べし、又臍中は動なきものなり、然るに動ある者は、五臟敗なり、輪郭并に腎間の動と見合て死生を決すべし、(同上)○此に臍中は動なしといへるは、理ならず、前章諸説可_レ從に似たり、

△(引、松井本)臍淺小者、不_二盡是短命_一、只以_二堅固不_二動移_一者爲_レ吉、四十歳以上者、或動移、右推則右移、病人如_レ此、則必死、年高而如_レ此者、無_レ害、是精氣衰以_二順序_一故也、臍之輪廓者、腹皮相聚爲_レ輪、如_二小酒杯之底_一、爲_レ廓、其輪廓堅固者、眞元氣氣強也、通常輪獨堅、輪廓全而臍不_二動移_一者、眞元氣全也、雖_レ患_二大病_一不_レ死、(楓亭)

△(同上)腹之左右、腹筋緊實者、必空軟、是非_二空軟_一、腹筋緊實而臍深故然也、(別本淺井書)

小 腹

○腹心を候ふ時に、手を柔にして、鳩尾より以下、臍下丹田氣海の分に至るまで、摩_ルろし、三指を以て、しなやかに、丹田を按ずるとき、呼吸に隨て、其後おだやかにして、内に何の障もなく、指を引けば、強きやうに皮肉起り、按ずれば張る如くしなやかなるを、是を元氣の根本と云、如_レ此なるは、假令大病にて、何程羸たる人と云ども、其病可_レ愈なり、とかく腹を按へみるに、手に隨て無力、臍下ぐわくとする様に、呼吸に隨て起ることもなく、手を引時に、手に隨て皮膚の起らぬは、是元氣疲れたる腹なり、如_レ此なる人は、其病輕しといへども、必不_レ可_レ治、若又如_レ此

の腹と云ども、痛ある時は、邪氣未退なりと可_レ知、又如_レ此にて、丹田を按ふる時、腹中に何物も無く、手の背まで冷拔が如なるは、死、五三日の間なり、兎角元氣あるを、腹にて候ふは、臍下滑にして、呼吸に隨て、抑揚するとき、強くして不_レ強、柔にして不_レ柔、抑へて揚るに力あるを有_二元氣と可_レ知なり、(南漢)

○臍下を按して、臍下筋ばるか、或は堅くして氣の盛なることあるか、又撫でて見て、臍下に至て築山をつきたる様に、ごつ／＼と肉の立つた處ある、此類が三焦不和の候なり、(同上)

○壯年の人、臍下弱く無力は、腎虛の人なり、按_レ之氣の保ありて、肉上やはらかなるは吉なり、老人は下虚上實するものなり、臍下の氣弱く和かにして、臍上より鳩尾の邊まで脹ものなり、此老人の常なり、又老人臍下の氣能はなるほど無病の人なり、(善安)

(森立夫曰、三伯同)

○臍下のまはりかたきは、腎虚としる、是腎氣のかはきにして、八味丸を用ふる場なり、(中虚)

○(森立夫引、中虚)時々臍下疼む者は、脾腎の虚なり、此證に腫氣來れば、必死す、

○臍のとほりより、少し下にてよこ腹を候ふぞ、ぐは／＼とよわくはりなうして、手のはいるやうにあるは、腎虚に屬するなり、(鳥巢)

○小腹はりあつて、たてに筋だちいら／＼と手にさはるは、腎虚なり、腎中の陽氣不足なり、(同上)

○氣衝腹のつけねの邊へ、内皮よりこそりてある病人、必惡なり、(白竹)

○天樞より下は、瘀血の如く、大筋の如く、臍の左右の下四五條、手に應じてひきはるものあるは、必死の候なり、(同上)

診 腎

臍至_二小腹、輕手陷下、重手如_レ按_二龜板_一者、腎氣之虚脱、臍下至_二曲骨、按_レ之陷者痛者、眞水之不足也、積在_二小腹、其動遲緩、時一止者腎積也、(無名氏)

△(引、松井本)一切病症、諸脈雖絶、而臍下温、其動未_レ絶者有_レ避、男女臍下、至_二曲骨穴、有_二一條筋如_レ繩、以_レ指按_レ之不_レ解者、淋癰之候、(無名氏)

○臍下甲錯して、按じてぐさ／＼する者は、頓死す、病人なれば不治なり、陰虚火動者は、動臍下より臍を夾み上りて、隔膜に迫る、故に短氣し、白沫を吐するなり、火動せず、但陰虚者、按_レ之其手帶_二青黑_一者、陰氣絶し極るなり、壯家者、臍下丹田を爪にて搔てみるに、硫黄の氣あるものなり、大酒肉食して、血熱強き者は、臍下より火出るなり、陰虚の火不_レ動ものは、臍下に如_レ箸筋が立なり、臍下任脈肉脱して溝の如し、兩旁堅く、中五分程が、ぐさ／＼とするなり、虚勞勞瘵の末にあり、必死す、總て動氣は多は水飲なり、又熱毒なり、久病不食して、中脘の左右に動ずる者は、胃氣絶なり、趺上は腫不至といへども、必死す、奔豚氣は、必ず任脈少陽の間にあり、(靈州)

○小便閉にてもなく、膀胱脹大して、皮外へ形見るゝことあり、甚しきは臍上一寸位まで見えるなり又甚しきは、臍上一面に脹なり、されども少し左へよるなり、なぜ右へよらぬならば、肝より陰囊などへの道筋故よらぬとみえたり、(同上)

△(引、松井本)臍下一寸有動者、奔豚之漸也、及臍上一寸者、奔豚之成也、(同上)

○腎氣實したる者は、小腹痛満して堅きともいはれず、しつかりとして不軟なり、坐禪などをしたる者は、小腹に堅りあるなり、又腰痛者、必ずしも痛ならず、臍を廻て凝結なく、小腹ぐさぐさとして腰痛は、腎勞に得たるなり、又腰痛者、必ずしも痛ならず、臍を廻て凝結なく、小腹ぐさぐさとして腰痛は、腎勞に得たるなり、腰肉脱し、髌骨あらはるゝ者は必ず死す、(同上)

○右の少腹に凝結しあるは、皆畜血なり、少腹痛み、食積虫積はなし、皆畜血か痛なり、左の小腹に凝結して痛もあり、其譯は任脈衝脈帶脈の三脈を以て、血室を養ふ、此三脈陽明の氣衝より分る、陽明の分れぐちに凝結するものあるゆゑなり、(同上)

○少腹に燥尿を畜るは、必ず左横骨に迫り、累々として塊をなす、左十分につまつた上は、右へも連るなり、按之いたまぬなり、ぐれつき長きなり、(同上)○腹兩傍の條と相參すべし

○食は先づ右へ納りて、克化の後、水分にて精粕尿となつて出るときは、右より臍下左へまはりて下る、故に燥尿ある症は、
臍へ 燥尿日数を歴て多くあるは、最もしかり、腸癰も此部位にあり、按ずる其部を以て候とす、
臍へ に、病人の心意痛を押すやうにいたく覺るなり、此部位の外にあるもの

は、腫物にても腸癰の類、外のものとなるべし、
(東郭○燥尿の診候、秦州、東郭其説同じからず、秦州を以て是とせんか)

○男子疝は、臍よりすこし下、右へよりつく、女子の帶下毒も、こゝに附着す、内經曰、男子七疝、女子帶下瘕聚とあれば、疝と帶下同處に候あること宜なり、疝強くせば、陰囊へ引ばる氣味あり輕き時は、臍下ばかりに引ばりあり、老疝になれば、心下へさへるなり、虫積は、左右共に拘急し、臍の右の下ひらきに凝あり、(同上)

○一通りの疝塊は、大略臍よりは斜に下りてあり、脾胃不足のこりは、臍より少し横へ下る心持までなり、左右何れにありても同じことなり、(同上)

○老人など、臍下左へより動充ぶるは、必死、咽喉腐爛の症など、此處に動充る者必死、凡諸病、此處高きもの危し(同上)

○脚氣と、勞瘵と、濕毒とは、臍下五六分任脈を開くこと各一寸許の間、左右の内必ず動のあるものなり、勞瘵の動は、虚にして數なり、大抵脈と應ず、脚氣の動は弦の氣味あり、濕毒の動は、定法なし、脈症を能々考て可察、濕毒を病たる人、必ず右の處、左右の内、動悸あるものなり、能々心得べし、此三症臍の動的候とはしがたし、(同上)

○臍下無力もの、之を按して沈で塊ありて、つよく按せば、臍の四方は勿論、五體へ響て堪がたき痛は虚なり、臍下はたわいもなきほど力なくとも、少も按せば痛あるも、虚に屬す、(南陽)

○臍下に堅塊の處々へまはることあり、是はさしてかまひにならぬこともあるべし、悪くすると、小便不利することあり、轉胞の因になるあり、(同上)

△(引、松井本)左臍下二寸許、有動者邪也、即下疳之毒、肝膽之邪也、臍右下則痔也、(淺井)

△(右同)臍右下二寸許、三行處有物鬱者、血毒或痔毒也、婦人則經水不調、唇燥、足心熱、臍左下三寸許、三行處按而筋變者、疝也、(東洋)

腹中行

○脾胃の虛は、中脘より以下、臍のあたりまで、任脈通り、箸をふせたる如くに筋たつものなり、宜く中焦を補ふべし、(壽安)

(森立夫曰、三伯同)

○腎水の虚は、臍より以下、關元石門任脈通り、箸をふせたる様に、真中に筋たつものなり、宜く滋陰の薬を與ふべし、腎虚の症も、先中焦より衰ふる故に、中脘以下、石門の上下任脈通り筋張なり、(同上○南溪同、又曰、液瀉などに此を見ずは死證なり)

(森立夫曰、三伯同)

○古傳曰、腹の正中、任脈通り、中脘盛にして、幅廣き、是を胃熱とするなり、又任脈の臑穴の處弱

く動氣なき者を胃寒とす、(南溪)

○任脈あらはれて、手にさはるは、惡證なり、これは内が甚だかはくゆるなり、平人も腹がそこねれば、任脈あらはるゝものぞ、これも内のかわきと知るべし、不足と知て補ふべし、臍上任脈あらはるゝは、臍下虚なり、臍下任脈あらはるゝは、腎虚なり、大病にて、任脈あらはれさうなる人のあらはれざるは、腹に腫氣あり、猶あし、(烏巢)

△(引松井本)臍之上下、任脈見者、爲脾腎虚、此脈見者、平人則將發大病、病人則至難治、勞傷等、陰虛火動之證、多有此候也、(久野)

○任脈のふとくすさまじく、張見ゆるは、惡きにもつき、又不苦にもつくなり、但し脾胃の診にて、臍上鳩尾まではるは、脾胃食滯の候なり、臍下の任脈はるは、腎の虚と知るべし、中脘の鬱の人に、一生煙管の如くふとく筋ばりて、息災なるあり、精察すべきなり、(白竹)

○任脈引はりて、煙管のやうになりて、神闕より心下へ連る者は必死す、是靈樞に出づ、百發百中なり、(臺州)

○任脈より少陰に連りて、火吹筒の如く筋立て力なきは、多くは膈を病て死す、(同上○此說南溪に本けり又衆疾脈略に精し)

○久病腹皮貼背、當臍上下有堅結、排之不動者、是脊骨也、(同上)

○透臍有凝結、按之則痛者寒疝也、宜薑桂烏附輩、(同上)

△(引、松井本)臍上任脈、見狀如筆管、或凹成溝者、俱脾胃虛燥也、動氣隨發、脾胃虛燥、故膜亦瘦而無潤粘、故皮膚與臍附離、而見此二候也、脾胃得養則諸症復其本矣、臍下有此候者腎虛也、肉滿而不開、潤粘而肥實、筆管狀不見者、腎氣足也。(蔡原)

腹 兩 傍

診 肝

藏氣法時論曰、肝病者、兩脇下痛、引小腹云云、經脈篇曰、其經布脇肋云云、故肝病、其診在兩脇云云、輕按摩脇下、皮肉滿實而有力量者、肝之平也、兩脇下空虛無力者、肝虛及中風一切筋病之候、因其左右、以知偏枯、雖男子積在左脇者、多屬疝氣、女子塊在左脇者、多屬瘰癧、動氣在左脇者、肝火亢也、(無名氏)中風診候は、肋下の條に詳なり、

○森立夫、引中虛(膈肉)と云は、任脈を去こと一寸五分の兩旁なり、任脈より五分づつ兩旁は腎經なり、去中行一寸は胃經なり、故に兩方の膈肉は、水上の精心なり、よつて膈肉の陥り脱するは、脾胃の虛なるが故に早く死するなり、

△(引、松井本)痞證屬右者、是食積、或乳癰瘰母之類、屬左者、是疝積及血塊之類也、(陽山)

○胃經とほりは、兩乳のとほりなり、これが川の瀬のやうに、しこつたるは脾胃の不足なり、(鳥巢)

○腹衰大横の邊が甚だ弱き人あり、必死になるべし、(白竹)

○左腹のつかへは第一腎虛疝氣と知べし、右腹は氣鬱たること疑なし、(同上)

○左腹は、十に八九は疝なり、腎水耗に從て、左のつかへ、胸へさしこむなり、(同上)

○肝は血を藏して、其部位腹の左にあり、故に左の天樞にて血の盛衰を候ふなり、血虛の症、其腹を候ふに、天樞の邊、表は軟にして、手を沈めて裡を候ふに、板を推すが如くに堅は、此血分の燥なり、左の天樞を血分と名く、何となれば、肝は血を藏め、其部位腹の左にあり。故に左の天樞にて血の盛衰を候ふなり、(南溪)

○滯食宿酒ともに、右臍下につく、胎毒も同じ、其うちに、胎毒は堅く、貯食は柔なり、(東郭)

△(引、松井本)胎毒者必在臍右傍、女兒右臍下、變急強者、病瘰癧、瘰癧病而右脇下變急強者、其毒從胎毒來、難治、(同上)

○凡腹部左引はるものは、逍遙抑肝の類、血劑にて肝血を和す、右は建中の類所主なり、(同上)

○外邪久く不解者、左の腹筋、右と比すれば力なきなり、中風の肚肉脱とは別なり、横腹にあらず、肚より内の腹筋なり、又左の上に、ばら／＼といくつも動あるも、外邪未解と知べし、(同上)

○下焦の左右せまく動あるは、耳鳴か耳聾なり、(同上)

○藥毒は、臍部腹筋ふさがるものなり、附毒に多し、(同上)

○左の臍傍に、拘急して凝たる證、面色青白唇紅、目下臉赤く、惡心、或吐清水は、蛔虫の候と

す、(同上)

○陽明胃經、按第二肋之端而下者是也、以左爲主、自左冲逆、及拘攣者爲水飲、左右拘攣、按之不痛者、雖痛反快者、是爲胃氣不和、或血虛、宜建中輩和之、少陽膽經、按第三肋之端而下者是也、以右爲主、自右冲逆者、爲惡血、拘攣者屬肝鬱、(秦州)

○大便閉、自左臍傍横、至右傍、或左横骨邊、累々如納瓦石者、是爲燥屎、(同上○小腹の條と互參すべし)

○内經に云てある、臍右に當て凝りある者は、胃氣の衰なれども、多く左にありて、さて左より右へ取廻してあるなり、又左にばかり有もあり、是を指て疝瘕とす、是本胃氣衰て、運化惡きより起るなり、又肝藏の氣は、臍右にあらはる、臍を去ること一寸許、下へ至てあり、そこに凝結す、(同上)

○左の陽明拘攣する者は、皆動氣あり、食毒の動氣は、大に打つて陽明臍傍へ連て拘攣する、是を候ふに、上衝ありやと問ふ、食毒ある者は、必ず上衝するなり、食毒強き者は、上衝につれて瘡を發するぞ、水飲の動は、大になり、小になり、常の動氣なり、水飲の動は、心下より左へかゝる、章門の通り、厥陰少陽あたり、引はる者あり、是も水飲の所爲なり、温藥にて下すべし、(同上)

○虻虫亦任脈より左へ係る、胃中に居るゆゑぞ、左硬滿して動氣す、水飲の動と混じ易し、重く之を按して築々然と細なり、又大に動するもあり、其動臍傍へ連ならぬなり、脈は數、或は大なり、腹中の動氣、ちよと、其脈に應ずるゆゑ、あてにならぬなり、(同上)

○右の陽明厥陰に係り硬滿する者は肝鬱なり、肝鬱は、即血不和、故に柴胡、或は四物の類を、通例與るなり、左にて腹痛する者は、虫積か、食毒、或は水飲、右によりて痛者は、皆血なり、右にかゝるものは、血劑を帶たものでゆかねば不治なり、(同上)

○すべて瘡の類左にあるは大事なし、右にあるは大事をなし、治しがたきものと心得て療治すべし、陽分の左は治し易く、陰分の右は治し難き道理なり、(支仙)

△(引、松井本)瘡積疝氣、一切邪氣、着左者不爲大事、着右者或爲大事、不可不知、(中虛)

△(同上)臍右傍、胃毒着之、臍左傍、按之痛者、遺毒、或燥屎也、其上一寸許、有不順之候者、虻虫也、(東洋)

△(同上)右脇下、按之筋牽引者、左足痛、左牽引者、右足痛、(同上)

△(同上)鳩尾傍三四分許、按之筋見者、患目疾、幽門之上下、細筋見者、患耳鳴、(松井)

肋 下

○大事の瘡と云は、脾胃の元氣衰る故、飲食を尅化する運行の力弱く、邪氣いつとなく滯り集りて、肋の下よりしころひさして下したる如く、板の様に支へるものなり、其瘡を手にて按せば痛をなしとかく肋の下に、くつろぎなきものなり、此れ中氣の虛するに因て、自然と集りたる數年の瘡にし

て、大事の痞なり、此痞ある人、大方後には腫氣服滿の證になるものなり、然る故に、腫氣服滿のさし出る病人は、先腹にて知るものなり (良務)

○中風を患る人は、二三年前より、章門の通より、腰骨までの堅筋の切れたる様になりて、按之無力ものなり、此人三年の内に、中風を發すること必定なり、左脇下如_(法、三伯)此なれば、左半身不遂す、右脇下如_(法、三伯)此なるは、易治、氣の行る故なり、治年は二三年前より認得て、補氣の藥、順氣の劑を、久服せしむるを善とす、(壽安〇白 森立夫曰、竹玄悅同) 三伯同上)

○凡人肥瘦長短の別なく、章門の穴を指を以て按し、其指先の筋を越て、深く季肋の中へ入るは、必定三年の内に、中風の病と知べきなり、是先師歴功の秘訣にして、百に一を失ことなし、(南溪)

○肋下無力、四十以前の者にもあり、是は強仕以上の者とは殊なり、其處の陽氣薄き故なり、枯せずといへども、痿するなり、又季肋より、腰髓骨まで攀急する者は、其方の手足拘攣するなり、病成ては不可救、又季肋攀せず、力なきに非ずして、偏枯するものは飲なり、治すべし、廢者は治すべからず、(臺州)

△(引、松井本)章門診法、一偏如_{(常、一偏柔軟者、不出三年一發) 偏枯、宜預日々多灸於其柔軟處、以助陽氣、而驅除飲、又一方拘急、一方如_{(常者、壯者無害、四十歳以上者、左則逐飲右宜和肝且灸、(風亭)}}

△(同上)章門上一寸許、按之痛者、其手痛也、章門一寸許、按之痛者、其足痛也、(淺井)
△(同上)季脇肉無減者、雖他證似_{(中風、不可爲) 中風治多食滯、或類中風也、必可診左右脇及中腕、其位不_{(結聚、手足不仁者、痿證也、(菴原)}}

心 腹 痛

○大抵醫の即効を得る處は、腹痛と嘔なり、其心得六ヶ條あり、積痛、食痛、飲痛、瘀血痛、腸癰痛、是なり、此六のものどれをどうと言れね中に、別て見誤ると死に至る者、食痛腸癰なり、予自然と多年の功を以て、病人を見ること、黑白菽麥を辨ずる如きなり、今其大抵を述るなり、○食痛は、心下を按すに凹みて、手の入ほど心下が背の方につく、此極て食積痛なり、此證は備急圓を用れば、吐下とも_(後腹)あり、然れども香平などを用るがよきなり、○積痛は、前の宿食の如く、心下不_{(回) して、じつと服て、心下に、手の不_{(入) もの此積氣なり、此もまた劇症なれば、背の動付もの、それゆゑ心下柔になることあるなり、○虻痛は、其處を按して、とくと氣を鎮め診に、びく／＼と手に當ることを心に覺るものなり、○瘀血痛は、多く臍脇少腹にあり、其痛處を按して、塊手にあたるなり、瘀血痛は、其痛彼是散亂して痛むなり、此痛は積氣にてもあれば、其處に飲聚り來るなり、○腸癰痛は、此病人十人に九人までは、右にあり按腹するに、左右何となく異なるものあり}}

其腸癰の上へ、手が行に、外の處よりも、ぬつめりと肌甚好きなり、それに、必ず右足變急、小便淋瀝するなり、疝或は就に似たり、醫誤て疝疝と思ひ、療治しても愈ざるは、多く此病なり、大黃牡丹湯、或は桃核承氣にて下す時は、妙に痛も止ものなり、小兒にも多し、心付べきなり、(東郭) 泰州曰、腸癰在臍傍、腫、右亦有之、又曰、又有少腹癰者、

○左右不容、承滿部位患、滿痛、按之彌痛、或引于胸腹中、奔響漉々有聲、時吐水汁、吐則痛減、是爲「澼囊」、宜溫藥、宜減飲食、(泰州)

○古傳曰、腹を候ふ時、塊積攻上て、不吐不瀉、呼吸も既に絶んとして、三部の脈も、既に結代し或は絶て手足厥冷するの證に、三の病因あり、一は年來の塊積なり、一は食物の留滯なり、一は疝氣なり、此三に於て甚だ辨へ難し、故に醫を學ぶ者、明に辨ぜざればあるべからず、其積を按へみるに、丹田氣海の分より根ざして上り、上腕鳩尾の地へ、時を取て升降するは、多年來の積塊なり若食滯なれば、多は升降することなくして、唯塞て動氣甚しきものなり、食滯の積にも升降するあり、其は必ず時を取て腹痛することあるなり、殊に動氣甚しくして痛むは、必ず天樞の地に在と知るべし、食積の腹は、按じて快、痛止むやうなり、塊積の腹は、邪氣に手の當る毎に痛絶がたし、然ども痛を實證とし、不痛を虛證とす、又章門京門の地に於て、或は左或は右にて痛は積なり、股の邊、氣衝の穴の分より指上るは、多くは疝氣の積と可_レ知、手を強くして按じ下す時に、漸々に引

て、臍下小腹の邊にて散ずるは、是皆疝氣の證と可_レ知なり、(南漢)

○古傳曰、腹痛不治の證は、中脘の所や、中脘の左右で痛は難治の症、腹一枚に痛と云は本道なれども、中脘の左右で痛は、不治の症ぞ、衝痛の腹は、是も中脘の間で痛は、其腹の形が表は柔にして、按して見れば、戸板を推す如く、堅く成て痛は、陽虛陰實の腹で死するなり、(同上)

○玉痛の腹と云は、是も上中脘の間が痛なり、臍水分の處を推して見るに、無力、上は鳩尾上脘に無力、上脘の左右にも無力、其中に凝て痛、是が玉痛なり、(同上) 玉痛當致)

○(引、松井本)腹痛心下至「横骨」、腹底如「伏板牽引」、而兩脇上下相離柔弱者、不_レ出_二十二時_一死、若中行有_二和氣_一者、可_レ治、(蘇原)

○(引、松井本)澼囊吐水久腹痛、有_レ可_レ在_レ左在_レ右者、左者易_レ治、右者難_レ治、就_二之胃形狀_一考_レ之、水溜_二於右_一者、不_レ便_二驅除_一畜積、而發_レ痛遂吐逆也、(泰州)

○腸癰は腹候にて決するものなり、臍下少腹の邊に塊ありて、指もつけることならぬほど痛み、皮「甲錯」とて潤なく、さらさらとなりて、腹痛はげしく、腹内雷鳴して、徳利より水にてもこぼす如きの音あり、又杓にて水を汲かへす如き音のするは、是膿をなしたるなり、さて指をつけても痛と云もの、常の積にもあれども、腫物の膿をもつと云處へさはるものなれば、痛む様子も、按した處もわかる者なり、半産に多し、産後と食傷の後腹痛するは、油断すべからず、度々ある病なり、「膿血

を下してより、腸癰と知るは、良工にあらず、(南陽)

○(森立夫、引中虚)腹痛は、榮衛の通行する道に、或寒、或熱、或暑濕、飲食停滯して、榮衛を閉塞する故に、其疹み左右へひきつり疹むなり、疹む所に、動氣あり、その動氣によつて、相火見る、なり、動氣數にして脈しづかなる者は虚證なり、地黄丸の類應すべし、動氣しづかにして、脈數なるは實證なり、病血分に在り、

△(引、松井本)心痛者胸痺也、輕者其痛在肌肉間、多在左、而連右、乍痛乍止、其痛連膻中者爲重、擊急者不爲害、如錐刺者真心痛也、所謂旦發而夕死、先宜飲麻油一合、以分隔其真氣與邪氣、夫胸痺之痛淺、若其痛深者爲懸飲、若中府雲門痛者、肺痛也、非懸飲、多死、不可下、肺痛多在左、肺癰亦然、(泰州)

腹 滿

○(引、松井本)鼓脹比之水腫、更爲酷疾、凡腹象按之綿弱者、諸病通爲惡候、若按之陷而軟者、爲虚脹、多不治、其病最酷、腹滿脹大、皮膚之色、如有蕪之肥膨而光澤者、萬無一生、公學按、傷寒後疾

見此證者、亦爲難治(陽山)

○鼓脹に虚脹實脹の別あり、虚脹は腹を候ふに、脹が弱きぞ、惣じて臍が切る、なり、實脹は、臍が

上りてどちらへ推ても動かぬ者ぞ、腹の脹が強し、手を以て推に柔ならず、是實脹なり、(南溪)

○脹滿の邪のある所を知るには、上より按付ては不見なり、其跡がざらざらと光出る者、此邪の滯る所なり、水腫の腹と同じくおさへれば、手の下から冷るものなり、是も邪の滯るからなり、又虚脹なれば臍が切れたり、脹ても柔なり、惣じて脹滿の腹は、さすりてみれば、張り子人形をさするやうに、がさ／＼として鳴る者、又はじけば、ぼん／＼と鳴るぞ、是は内空虚なる故なり、鳴ることなきは、内氣の脱虚なり、されども、先は難治なり、又不治の症は、決して見様あり、先臍のぬけて、まひ揚ることあり、是は元氣の脱するゆゑぞ、肺先脾募の所がぬけるは、早く死するなり、上下の氣離れて氣滯る所がある故なり、是不治の症なり、肺先脾募は抜けずといへども、鼓脹は難治なもの、先死證を見るに、臍凸に拔て、肺先脾募に、(腹とき鼓)長きは決して死證なり、(同上)〇宜く兼疾中の腹滿條と互參すべし、

○總じて腹脹を患る人は、皆底に塊あるものなり、塊なくして腹脹るものにあらず、ちよつとしたる脹は、此例にあらず、一旦急に脹するなど、塊なきあり、是は腹診を詳にするときは分るものなり、(東郭)

○腹滿に附子を用るは、皮厚にして潤なく、脹りたるに行くなり、(同上)

婦 人 妊 娠

○男は陽に屬して、一身皆陽を體とす、故に腹亦自然に強く、氣質雖柔弱、女の壯實なるよりは強し、女は陰に屬して、一身皆陰を體とす、故に男とは格別に反して、柔弱和緩を現せり、多産の婦人は、腹診の例を以ては云難し、然ども其間に虚實を可_レ見なり、○婦人の腹にも、有_二陰陽二象_一なり、陽腹は是氣有餘血不足にして、婦人の常象なり、故に多_レ孕、或は中年以後多病なりとも有_レ孕なり、陰腹は是血有餘氣不足にして、婦人の變象なり、故に壯歲に無病なるも孕_二ことなし_一、(對時)
 ○婦人天癸初至る時、淫心甚して慾事不_レ遂もの心を勞し、腎を傷り、水火不_レ交の否_二となり_一、漸く積で、痞塊の證をなすときは、其後夫婦の交を成とも、終に子を生ずることなし、何を以てこれを候ふかと云ふに、其婦人の腹の上下を診するに、鳩尾の下、上脘中脘を按すことを甚だきらひ、右の章門の下に積氣ありて動搖し、腰常に冷る者、是必ず子なきの證なり、自_二先師_一至_レ吾、此を以て候ふに、百に一失なきなり、(南溪)

○女子十四許、虚里の動、乳上に及ぶ者あり、是經水來れば、低くなるなり、(臺州)

○(引、松井本)女子虚里動高者、臍傍有_レ動、與_レ之相應、是天稟薄弱也、節_二飲食_一則無_二大害_一、(臺州)

○血塊在中行者、爲_レ在_二胞内_一、經水或來或斷、宜_二導而治_一之、故經_二日月_一則疊積、在_レ傍者爲_レ在_二胞外_一、挑_レ之則動或痛

宜_レ破_レ之、不_レ動不_レ痛者、慎不_レ可_レ攻_レ之、在胞外者、經水不_レ斷、内經謂_二之腸胃_一、○(同上)

○帶下之病、小腹如_二囊盛_一蛇者、不治、(無名氏)

○婦人の腹上よりだん_レに撫でゑるして、臍に至り、ぐつと一段落ちるものあり、是は産後血を多く下すか、さなくば崩漏帶下か、いづれ脱血の人と知べし、且動氣亢るものなり、此は血虚の候なり、(葉庭)

○腹の内に、底につらくとして覆などまいたる如くに、皮しはより、引けば一處へよるは、小産の後か子をゑろしたるあとか、産後よりの病か、此三等_(者歟)に定まる、心得玉へ、(白竹)

○古傳曰、凡經水滯留する婦人をば、皆以妊娠と疑ふ者多し、醫たる者、明に辨ぜずんばあるべからず、先脈を候ふに、尺澤の動脈甚しく、且太衝の動脈甚しきは妊娠なり、腹を候ひて知らんと欲せば丹田氣海の地に、動氣ありて、時として上脘の地へ上らんとするは、是妊娠に非ず、血塊なり、唯沈で、手の下に沈む如くなるは、血塊にあらず、必ず妊娠なり、又動氣會てなきもあり、是手を以て暫按へるときは、手の下潤ひ、汗少し出るは、妊娠なり、乾きて汗なきは、血塊なり、此可_レ秘の專一なり、先師以來、效を得ること、百に一失なし、猶向後試むべし、(南溪)

○又曰惣じて、懐胎の形をやどす所は、臍下氣海丹田の邊にやどすものなり、然ども積聚、或は瘀血などが滯ること有て、難_レ決ぞ、其時は臍下を手の平で上へ按してみれば、瘀血か積聚なれば、手を引や否や、本の處へ歸るぞ、推上て見るよりは、又候ひ様があり、惣體夜明て食をた_二べぬ時_一に見る、空腹ならざれば難_レ見ぞ、空腹の時、臍下の形、雞卵の形に、むつくりと高さものなり、夫に手を掩

てみるに、手のはゝかる様に、眞綿を握た様にむつくりと當るものは、必ず懐胎なり、瘀血積聚は病、故に手を以て按してみるに、内からむつくりとせざるものぞ、是はやわらかな候ぞ、又一の候法は、高き處を推に懐胎なれば、痛まぬものなり、瘀血積聚なれば、痛者なり、(同上)〇陽山 稍同〇久野同

〇(森立夫引、中虚)懐妊と枯血と見分様、平且に臍下を按して見るに、懐妊なれば、こんもりと高く起つて動ものなり、血聚なれば、高く起といへども、動氣なきものなり、惣してつかへの類は、朝内は必ず上に浮くものなり、

〇又曰、死胎の者の腹は、臍下寒ゆるなり、子息災なれば、其子の陽氣あるに因て温なり、其子が死ぬると陽氣脱するに因て寒なり、(南溪)

△(引、松井本)妊娠者懸横骨不痛、瘀血則懸横骨必痛、(楓亭)

△(同上)經斷四五月、如胎而不動者、非妊娠也、或有肝疾筋攣如胎動者、宜熱察不誤也、(原)

〇凡診妊娠受胎、百日以往爲可百日前、亦宜於平且空心診、平且少腹脹而胎見、是以爲宜、忍小便亦如此、胎之所居在中極、四寸部位、間、有偏右者、胎大如雞卵、軟而滿有光澤、按之則手下滋潤、不痛不移、正是灼然妊娠也、按之皮膚乾燥、如有三稜角、或有四者、又按之則痛、或轉移、如此則爲瘀塊、痛爲瘀、不痛爲妊、最是捷徑法、其所位必在右邊、其在任脈或左者、殊十中之一耳、不可不知、(臺州)

△(引、松井本)或肚腹脹攣引脇腰而痛、公嬰按、肝經脾經具拘攣者、是也、或得按痛或動甚、爲血塊之候也、若在育孕

之時、欲知其變、臍中無神形、肉脫脈細數、或兼滯諸虛憊者、調護失宜則胎自墮、厥身亦斃、(山)驗胎の説は賀川氏の産論及翼に詳なり茲に録引せず

小兒

〇凡小兒自四五歲、至三三四、筋肉猶未強壯、故腹皮多薄、虛里胸脈多動、此亦所可預知也、(秀庵)

〇小兒は三蒸十變にも、其時を逐て、腹象異なること有べし、四五歳より、少し中脘脹るべし、藏府未實して、食用の多少に因て、腹象變ること多し、只腹形小にして、能しまりたるを宜とすべし、十歳比より、漸く上脘中脘俱に細長く、三焦同じ位に板を立たる如くなるなり、俗に丈に長する故に瘦るといへども、此時藏府の大體定て、實としまりて、自ら瘦る如くなるなり、思ふに、初生は陽盛にして、氣常に上る、故に上に脹り、陰漸く長するに隨て、下焦も實して如板なるなり、天年篇曰、人生五歳、五藏始定の義に據るときは、腹部も是より定ることを可不知、十歳已下は、只其時々の病變を診するのみなり、十五六歳より、腎氣旺して、下焦も可實、然ども虚弱の者は、未可實也、(對時)

〇小兒は十四五歳までは、上の脹て下のすくを平とす、是胃府の壯實なる故なり、(臺州)

△(引、松井本)小兒之脈不可據、唯診腹可_レ以決、有_レ熱者、心下有_二細動_一、雖_レ無_二他證候_一、病必生、大人亦然、或發_二癆腫_一、或發_二驚_一、宜_二注意_一、(南陽)

△(同上)小兒臍下軟弱者、雖_レ無_二病_一、後必發_二驚風_一、須_レ減_二少乳食_一而調_二和脾胃_一、若乳食飽滿則生_二乳癖_一、終爲_二驚風_一、是十不_レ失_一、(宗柳)

△(同上)小兒胎毒、着_二心胸_一者、腹候難_レ診、先診_レ之、宜_レ用_レ指橫按_二肋下_一、熱察則其毒高入_二心胸_一者、不_レ然者、可_二分別_一也、(東郭)(宜_レ參_二腹兩傍條_一)

△(同上)胎毒者、臍之右傍凝結也、其結在_レ臍者、亦毒也、(二頁)

△(同上)小兒生下之時、或吐、或下、或發_二瘡瘍_一、則胎毒發泄、若不_レ然、則附_二着於_二神闕四邊_一、(別本 淺井氏書)

○小兒發熱盛にして、心下の動、ずつと腹中へさかのぼるものは、必ず直視の患あり、預め病家へことはりおくべし、何ほど熱つよくとも、其動上にす、まず、惟水分臍下にあるは直視なし、此診察痘瘡驚風などに入用心得ておくべし、(要庭)○痘疹腹候は、後の衆疾中に詳なり、

衆疾腹候

前諸條中既に其説あり、然彼は腹に就て病を知るの法なり、此は病に就て腹を察する訣なり、

中風 中風の候、腰のつがひ骨と、肋骨との間へ、手をやれば、ぐさと入る、是を大肉の離

れたと云ふ、中風の漸にして、必ず手足麻痺するなり、中風にて卒倒し、人事を分たぬものなれば何れでも大肉の離るる方不遂し、不治の症は、左右共に大肉の切れたるものなり、譬ば言語正しくして、人事を見分といへども、兩方の大肉離れたるは必死なり、(南漢)○久野同 ○前肋下の條と互參すべし、

△(引、松井本)中風偏枯、左臍傍有_レ塊、引及_二脇下_一其狀猶_レ物有_レ柄也、蓋偏枯亦起_二因於_レ此_一、十可_レ愈_二八九_一、無_二此塊_一者難_レ治、(二頁)

中氣 中氣の證の腹は、中風の如く、大肉が不_レ離なり、故に大肉の離と不離とを以て、中風中氣の別とするなり、中氣の腹は、臍ぐたつき弱きものなり、(南漢○一頁○久野同)

發熱 何ほど脈數にて、熱強く見ゆるとも、腹候して腹に熱のなきは、追_レつけさめる表熱なり、さて腹候のとき、掌中へちり_レと熱勢の見ゆるは、伏したる熱にて、容易にさめず、わけて小兒の暴熱するは、甚だ見分かねる、引付もあるべきや、どれほどのことにならんやと覺東なく、脈にては知れかねるものなり、ことごとく腹候にて決知すべし、心下の真中に動氣もありて、手掌へちり_レと應ずるは、油断すべからず、(南陽)

癰 癰症は、其本溼熱より致すものなり、腹は大抵右へつかへるものなり、是中焦不足する故なり、先陽明胃經に邪を受るものなり、(壽安)(森立夫曰、三伯同)

○瘧の候多くは右につかへ、惡寒強くして發熱す、左つかへることもあり、其病人は、必ず綿延として斷じがたきものなり、(支悅)

△(引、松井本)瘧按之皮膚脹、急筋見、當胃經之分、或有動、或有塊、得按痛腹大而熱者、此邪之所聚也、其形狀概類食積、右脇下有塊、命之曰瘧母、塊上按之則痛發作、有時或當章門有動、其動衝及胸下者死、凡瘧邪在左者惡寒甚、右者惡熱甚、寒熱異因、宜明辨焉公醫按、諸病屬、寒熱者亦、然(陽山)

△(同上)瘧之腹候、左右肺先脾募痞、或左痞、而右不痞、或右痞而左不痞、中焦凝滯、腹力軟弱而外熱也、又瘧兼痢者、表熱盛而肺先脾募痞、左天樞有動而凝結甚也、(久野)

○瘧母は、左の脇下より、左の小腹まで、眞一文字に引つるなり、(東郭)

痢病泄瀉 痢病泄瀉の證、中脘より以下水分のあたり、痞あるは、假令數日に及びたりとも、檳榔枳殼の類を以て疎泄すべし、又下脘の水分の邊つかへなくて、(按して、三伯)腰無力はたとへ近日の痢病泄瀉なりとも、宜く補氣の劑を與ふべし、(壽安○支悅同)

(森立夫曰、三伯同)

○(森立夫、引中虛)痢病に腹くらくとして、澁紙の如く、臍の廻り堅くして、いづくも動氣くらくらとするは虚證なり、六君子類にて補ふべし、

△(引、松井本)痢病泄瀉之候診、自中脘下及水分、按之有塊者、不問病之新久、宜用消導滲利之劑、攻之按之無塊者、不問病之新久、慎不可攻之、是乃治療之要也、凡痢者因脾胃之濕熱、泄瀉者因脾胃之虛損、候之岐骨之下、四指並排按之、拇指盡處是胃之上口、推之無力如綿者、即胃氣虛也、食必不消化、謂之中氣之虛、腹候如此者、往々難治、或按之蔽骨之下有動、其動甚者、遂成禁口痢、或水分支滿、小便微利、大便澁不通者、治方專在滲利水氣也、(陽山)

△(同上)泄瀉之腹、胃之(胃之二字悉、松井)上中脘無聚塊、或爲溝虛、筆管許者虛也、宜補焉、中脘天樞按之痛者、積也、宜下焉、水分無積滯而下利者、宜分利消導焉、(家原)

○古傳曰、痢病は、腹中上下を按す時に、必ず章門の地に動氣あり、この動氣手に隨て昇降する者は必ず外邪を兼たるなり、若動氣處を定て不上下は、只内傷と知べきなり、外邪とても、先食積に傷られて、風寒暑溼を兼たるなり、(南溪)

○又曰、泄瀉の腹を見るに、臍の左に凝滯する物あれば、必ず痢になるものなり、又痢病の腹臍の左右に凝り、鳩尾に動氣ある者は、必ず禁口痢なり、又臍の右に凝り塊あれば死證なり、(同上)

△(引、松井本)痢疾胸部痛而熱、手足冷也、且虛里動盛者、必變證急至、中脘以上有動而嘔氣甚者、將爲禁口痢也、凡痢疾之腹、左痞者爲常、右痞者爲惡候、右痞者欲下之、則大便窘迫而不

下、故爲惡候、左不_レ然、(久野)

○痢疾、不容承滿部位、或臍兩傍、或少腹有_二凝結、大如_三胡桃、有_レ動者、爲_三毒至重、結在心腹、難劇可_レ治、唯在_二左不容_一者、必爲_三禁口、按_レ之熱痛者宜_レ下_レ之、(臺州)

△(引、松井本)下痢者、臍以上皮熱、爲_三脾胃蘊熱、臍以下皮冷爲_三脾胃虛寒、(黄山)

○痢毒臍の右へまはり動ある者は多くは死す、小兒外熱つよくあるもの、若左の動氣手に應ずるは、必ず痢になるなり、(東郭)

脚氣水腫臍滿

當時の脚氣は、本疝瘕ありて、更に溼邪に感ずる故なり、腹診も臍の左の疝毒、任脈へせまる、甚しきは任を昇て心をつく、下焦の溼、足より上て初て腹へ入れば、臍下に動ありそれより一寸づゝ上へ上りて、遂に心を衝くなり、(東郭)

○水腫の症、水よく利し、腫悉く去ても、心下に水結あるものは、必ず再發して死す、右痞鞭するものも亦危篤なり、(同上)

○脚氣水腫有_レ動者危、冲氣雖_レ低、動不_レ止者必死、人迎動高者亦水逆也、爲_三難治、(臺州)

○水氣病、中脘或臍上如_三約束狀_一者、爲_三中焦虛、難_レ治、(同上)

○水腫脚氣ともに、心下に動氣の見えぬは大事なし、心下から動氣を催したらば、油断はならず、脚氣の衝心は、心下と動氣と呼吸と、脈にて決すべし、(南陽)

△(引、松井本)水氣、脚氣、心下有_二痞塊、而有_レ衝心者、有不_二衝心_一者、知_レ之有_レ法、輕手按_レ之而其塊直見者、多不_二衝心、重手按_レ之、其塊漸診得者、不_レ可_レ忽、必衝心也、宜_三注意_一矣、(太田隆元)

△(同上)水腫臍突出者、元氣脱、而臍根絶也、必死、(久野)

○水腫脹滿の症、腹内甚だ脹りたる者、臍をゆり動かして見よ、臍の後十四の處を離れ、あちへ動きこちへ動くは、あくまで腹は脹ても、臍の後の控されたるなり、此必死の症なり、腹緊脹すといへども、臍を動かして、十四の處へよくつきて、左右へ動かざる者は吉なり、治すべきの證とす、腫脹の診候、かくの如し、(壽安○女悦同、又白竹説あり、臍中條に出せり、)

(森立夫曰、三伯同)

△(引、松井本)水腫脹滿之證、按_レ之至_レ臍、臍隨_レ手移_三於左右、重手按_レ之離_三乎脊、失_二臍根_一者、併云臍切也、必斃、按_レ臍而臍不_レ移、重手按_レ之、有_二臍根_一者、雖_三腫滿十分如_レ鼓、猶可_レ醫也、凡以_レ指彈_レ腹堅滿有_レ聲者、及外如_レ撫_二鼓革、而内空虚者、任脈中行按_レ之無_レ神、其肉陷下不_二隨_レ手起_一者、下脘有_レ痛者、咸是水腫之惡證、腹皮薄而軟脆、初白色而漸々變_レ黑、脇背強脹青筋見者、咸是脹滿之惡證、未_レ有_二不_レ死者_一也、(福山)

△(同上)水腫脹滿、雖_レ有_二百般惡候、臍下下元兩章門之下、元氣實者、必治、(蘇原)

○脹滿症に、鳩尾まで動氣あるは、必死なり、(中虛)

○(森立夫、引中虛)脹滿の病、鳩尾の動氣浮大なるは、猶可治、脈亦同、浮細數者は難治、

心 虛

心虛驚痰、並勞心の腹は、左筋ばり堅し、左右ともにあれども、左甚しきなり、其引ばり先き心に乘るなり、勞心甚者は、水分の動充り、或は動に結代あり、異風なり、(東郭)○前水分條と相參せよ、

癆 疾

△(引、松井本)勞瘵之腹候、皮膚薄脆無潤澤、按之臍中有動、或臍右有動、而臍下無神者、是火亢尅水源之象也、胸腹虛脹、皮膚緊急、按之無神、或臍之上下左右悉有動、或幽門無動、水分有動、且按之痛者、血液但盡、相火孤立之象也、公堂按、幽門水分有動不痛者屬積氣、可治瘵、(陽山)

○瘵疾に、右の腹よりつかへくるものは、不_レ治、(中虛)

血 症

△(引、松井本)諸吐衄之證、凡吐腹拘攣、皮膚急而熱、胸腹時痛、壯熱有動、任中牢堅者、或虛煩、坐臥不安者、腹象陰陽不可名狀者、是其候、或動勢彈手、壯熱如灼、前證備者、爲_二內虧、遂至不可救、公堂按、脾右宮、於腎經、動甚者、腎虛火動也、或屬熱動不_レ甚、吐_二熱血者、爲_二酒傷胃、此證吐_二熱血者、不_レ治、(陽山)

△(同上)吐血由_二於實火者、任脈現動、與_二虛候之動、其力自異也、凡人急走則有_レ動、彼動與_レ是同理出血止則動亦止、(東郭)

○諸血症、胸腹に動つよく、物事少しのひびきにも驚きやすきは、其形狀よくみえても、不治に屬するもの多し、(藥庭)

積 聚

△(引、松井本)腹内不_レ問_二上下左右有_レ動、果然按_レ之、移者聚也、不_レ移者積也、積

聚皆有_レ動、如_二彈指者、是氣爲_二積聚、所_二支滯而動也、譬猶_二水流激、石起波也、(東郭)

傷 食

傷食の腹に凝り脹るは、知れたことにて、手ざはりやわらかにても、はりあつて、内が一まいに凝つてあるものなり、別けて水分、下脘のあたりが、さうあるものなり、上づりに凝つたは吐するもの、下づりに凝つたは瀉するなり、中の凝つたは、吐とも瀉ともかたづかぬなり、(烏巢)

△(引、松井本)將_レ爲_二霍亂者、水分痞也、尋常傷食者、水分不_レ痞、(久野)按此說似_レ拘

游 囊

游囊の腹候は、先活物を囊に入れたる如く、不時にむくくと、彼こ此へ高くなり、實に鼠などを囊に入れたる如く、頭尾あるもの、様に、こちらより推せば、あちらへひよつとぬけ高くなり、上より推せば、下へぬけなどして、定所なきものなれども、先多くは臍傍よりして、右の脇下などへ差込ものなり、(東郭)

嘔 吐

嘔吐の症に、動氣鳩尾の下までさし升ることあり、此症に粗忽に薬を與るときは、其嘔吐必ずつものるなり、先其動を静めて、其後に薬を與るやうにすべし、それには、鍼か丸薬の類佳なり、鳩尾の動静まつて後、煎湯を評議すべし、良務○良務又曰、鳩尾の下に、少しなりとも動氣のくつろぎあるときは、薬をあたへて効あるものぞ、久しき吐逆のやみかぬるは、皆動氣のさし上る故なり、

△(引、松井本)嘔噦病人、診察之間、重按鳩尾、則乍發嘔噦、不可不識、(東郭)

腸鳴翻胃

腸症の腹は、中脘の底、板の如く堅きもの伏するなり、(壽安○玄悅問)又曰、今不病といへども、後果して病むなり、秦州亦同、皮がぐさぐさとして硬き者と皮と離て居るやうなるは、多くは死す、

△腸噎之證、未病之始、上中二脘、按之堅硬如盤、或表和裏硬、肌肉編硬者、法爲其候也、其至按之、肚腹無神者、雖司命、無如之何已、(陽山)

○腸症の腹は、臍の下へかけ、盃を伏せたるやうにかたきものなり、是臍の右より、臍下まで、大腸の位する所ゆゑ、今大腸に食物をつゝみかね不行ゆゑ、如此となり、是死症としるべし、(中虛)

○(森立夫、引中虛)但大腸空うして無停、胸膈の中に、氣の滯りつかへるばかりなるは、治す、

○或曰、腸證の腹は、表裡共に堅くしてこぶ／＼たつものなり、又曰、翻胃症は、中脘脱して弱きものなり、胃腸虚脱するゆゑなり、(南溪)

○腸噎を患る人の腹は、水穀の潤なきときは、燒土をいろふが如く燥くものなり、(養庭)

蠅虫

△(引、松井本)其腹候、按之肚腹時痛、皮膚帶熱、三焦不和、乍脹乍縮、腹象無常拘攣牢堅、任脈中行動勢浮沈、腹中時冷、肚腹青筋見焉、或任脈陷下、綿弱無神者死、(陽山)○宜參、

腹傍痛等候

△(同上)蠅虫之候、大抵腹皮緊滿、如張薄帛、或臍下右傍有塊、如按故綿、毒塊亦如此、唯堅而

不柔、(東郭○一貫)

△(同上)蠅病之腹有三候、腹有凝結如筋而硬者、醫以指強按摩之、久則其硬者移他處、又按摩之、則亦移他處、或大腹、或臍傍、或小腹、無定處、是其一候也、右手輕々按腹、停手稍久、潛心候之、有物如蚯蚓變動、隱然應手、而又腹底微鳴、是其二候也、高低凸凹、如眠臥狀、熱按之、彼此起伏聚散、上下往來、浮沈出沒、是其三候也、(玄祐)

痺 古傳曰、痺證の腹は、臍の上下に動氣有て盛なるものなり、風寒溼の三氣表を閉て、皮膚に發達すべきの氣が塞るに因ての故なり、是痛風の證なり、(南溪)

癢 古傳曰、癢證は、帶脈に見るものなり、皮膚に現るものではないなり、天樞の左右を指を以て按すると、指に當る者、紙然か貫ぜんよりの様に當るなり、是癢證なり、(同上)

○(森立夫、引中虛)脇下の筋されずして、左右のうちどちらなりとも不遂は癢證なり、尤中風よりも難治なり、

腰痛

或曰、腰痛を候ふ腹は、京門の處の肉弱くして、指を入るゝに、ずく／＼するものは、或腰痛をなすぞ、果して不遂なり、(南溪)

消渴

古傳曰、消渴の腹は、表柔にして、裏堅き者なり、腹を見るに、表に手を當れば柔に、推して沈めて見れば、疊を按すが如くなり、此が消渴の腹なり、又臍の右に動氣ある者は死證なり、

精氣不足して虛火のみ盛なるゆゑなり、(同上)

△(引、松井本)消渴之腹、恰如陽虛陰實之腹、然彼則按之覺快、此則不然且堅而有力、其狀累々然也、(久野)

淋病

△(引、松井本)下脘水分實塞、而小便澀痛者、胃中濕熱也、又氣海有動、而尺脈有力者、或大便結者、亦濕熱甚也、臍下如容筆管者虛也、宜補血劑、(久野)

小便閉

小便閉、臍下腫起、大如雞卵、漸大漸脹、按之則痛、時々欲小便者、是爲實、按之不痛者、是爲虛、脚氣復閉者、臍下反重○(臺州)

○小便閉は、任脈曲骨に迫て塊をなし、按ずれば溺氣を催すなり、(同上)

○轉胞小便不利の症、臍下に塊あるものなり、圓きは治す、梯核の如きは不治、(東郭)

卒死

頓死の腹は、皮膚實して、腹底勢力なきものなり、(壽安)

○或曰、人俄頃の間に昏倒する者、先づ神闕の動を候ふべし、微々として、脈尙あらば、鳩尾同兩傍に深く鍼すべし、此にて效なくば、神闕を深く刺べし、若夫にても驗なきときは、不可治なり、凡此症は、邪氣心包絡に入て、心氣を奪ふが故に如し、此なり、(南叔)

中惡

古傳曰、中惡の證は、不圖おそろしき事ありて、病で氣下陷する故に、腹は必ず水分の處に、氣結で塞るなり、是は大肉切るることも、臍のくたつくことも無きものなり、(同上)

結毒

總て結毒ある腹候は、皆心下へ聚る者にて、先大柴胡を用る腹形に似たり、されども輕々に數遍なで、みれば、何となく、手ざはりに違あり、此手ざはりのあんばいは、數年病人を試て、意解神識すべし、格別手強く按しては、反て分らぬものなり、胎毒は、固よりにて、小瘡梅毒瘡瘡の内攻、脚氣等の諸毒、悉く心下に於て、其候をあらはすものなり、只一きは違ひたるものは、天刑病を患たる人の腹候なり、此症已に面形色を失ひ、合谷の所、或は肩なども、肉脱したるものは、果して其腹ほかとして虚脱したる腹の如く、妙に違ふものなり、されども、若眞の天刑病にあらずして、血風などにて、假に天刑の形を見はしたるものも、矢張結毒の候あり、然れども結毒を診候すること、唯診候のみには限らざることゆゑ、天庭の血色、皮膚の候、腹脈などを以て、參伍錯綜して候ひ得べきことなり、(東郭)

○結毒の證、圖の如く拘急するを以て標的となすなり、(同上)



○凡外出瘡毒内攻は、毒左の上につく、手掌を以て、胸より撫であろし、圖の如く、きれて、毒の付く處堅し、左を上とし、表とす、故に先左につく、是皆瘡毒なり、若問て、外瘡の覺なければ、必ず瘡血の上りつくくなり、血熱ある症は、吐血することあり、



左右ともに如し此は、虚腹にて、拘急強なり、別診なり、(同上)

○濕毒の内攻は、臍下一寸許の地に凝て動氣あり、此凝去らざれば、手足の痛等愈ることなし、さて其毒上へ上る時は、臍下より左へまはりて上るなり、決して右より直に上ることなし、其故は左を東とし表とする故に、左へまはりて上るなり、(同上)

△(引、松井本)毒之痲疾者、左横骨上有筋斜立大如箸也、毒雖甚、其來新者、無此筋(二頁)

○濕毒を煩ふ人には、臍上五六分許、任脈を排くこと、各一寸許、左右の内に、必ず動氣あり、大抵寸口に應ず、是を以て瘡毒疑似を決することあり、(要庭)

痘疹

古傳曰、痘疹は腹を以て候ふには、鳩尾さきの動氣高きものなり、大抵風寒の邪にて鳩尾さきの動氣高からず、熱甚しく、鳩尾さきに動氣高は、必ず痘瘡を發するなり、熱甚しく、掌中の動氣盛なるも、必ず痘疹なり、又痘疹發するに隨て、鳩尾の動は止ものなり、然るに、出齊にも動の止ぬといふは、痘毒熾なる故に必ず死するなり、(南瓶)

○痘瘡順證に似たりとも、臍下動甚しきは必死す、(毒安○支位同、又曰、臍下動微く、深あるは不死、深なきは死す)

(森立夫曰、三伯同)

○痘輕重を知る法は、少腹に動甚者、皮膚枯て潤なし、動輕者は、痘も輕し、動甚は熱も痘も甚し、不可治、痘の筋合よくて、たとひ不_レ死とも危し、其動虛里にあるもの、鐘をつく如くなるあり、但動甚しくして腹痛する者は、大黃にて下すべし、其動氣は毒故に下すべきなり、(寒州)

○痘瘡在_二不容邊、動高者、必難治、(同上)

○痘八九日より、未だ心下に動あり、後に胸上へ上るものは、必ず煩燥して死す、去ながら、貫臍の節は、少々動出るものなり、動胸に上りても、腹に根あるものは、又本へ戻るなり、胸に動ありて、下に動の根なきものは必死す、諸症も亦然り、是秘中の秘なり、(東郭)

△(引、松井本)治痘之法、宜察寒熱以施藥、欲知其寒熱、勿拘方書、所謂痘影形證、以診腹爲主、診腹以任脈爲要、裏寒者腹表、兩傍雖大熱、中行久按之、則無熱、遂微冷、雖有口渴脈數、痘色紅紫等、假熱之證、非真熱、故不及中行也、是寒凝不行、水極而似火之證、用大溫藥爲中、勿畏怖焉、此證尤多矣、又雖有寒戰咬牙、痘色淡白、下痢等證、任脈行有熱者、是假寒伏熱、而熱壅不散、火極而似水之證、用大寒藥爲中、勿畏怖焉、(宗柳)

△(同上)治痘必以知寒熱虛實爲要、欲知此四者、在腹候而不_レ在形證脈狀、抑寒熱之候在任脈、水分以上診之、停手久則可_レ辨其寒熱、不可_レ拘外表假證、虛實之候在臍下、痘毒多少之候、在肝經、毒多者、肝經牽引而熱盛也、毒少者、無熱也、(同上)

△(同上)痘疹危急之際、雖毒氣甚多、惟無相火之動者、可治、其外候雖吉兆、然臍下動勢甚者、實爲難治之症、又按掌中及蔽骨下、有動過起服、其動息者佳候、或過漿水貫臍之期、動不息者、毒氣盛於內、奪正氣之象也、於法爲不治、(陽山)

△(同上)痘瘡候臍下、或左或右、有動低者、其毒輕、高者其毒重、虛里動甚者、險症也、其動築々然未散時、宜急下之、(楓亭)

死 生

前の諸條中、既に其說多し、宜く互參すべし

○古傳曰、内經難經に載する所の死生を知る法、大略皆脈診を以て云、然ども腹診の傳法に、又一法秘訣あり、その醫の手を以て、病人の腹を按もむ時、丹田氣海の地に、さし張たる如くに、中の藏物をしつかりと持てこたへあるは、是を元氣と云、是を目當に腹を候ふに、若按して絶るほどなるは、元氣虚衰の證なり、必ず病重るべきなり、若又大病の後に、丹田氣海の地、如此なる者は、必ず三十日の内に可死なり、又大病の後、鳩尾の下の間に、細く筋張り、皮肉離れたる如くなるものは、必ず十四五日の内に可死、又腹中の動氣不退して鳩尾の下、兩の骨下までさしこみ、攻上るものは、必ず七日にして死すべきなり、已上の診法は、皆病中病後の診なり、假令、人迎寸口の脈平和なりといへども、此症ある者は、不可治なり、(南溪)

○(森立夫、引中虚)腎間の動氣ありといへども、亦死する者間有之、灯火欲滅、其光暴明なるが如し、浮大にして無力、按之即無者、是無根ものなり、

○邪氣離れて後、腹の上下左右平和にして、強く堅固なるは生なり、邪氣離て後、脈靜に足下温るは

生なり、邪氣離て後、腹中ぐわくして、布袋に石を入たる如きは、死證なり、邪氣離て後、腹中に物なく、唯ぐさぐさとしたるは死證なり、(同上)

○久病人に、兎角に不可治と思ふに、不圖腹部よくなり、一日一夜の中に、驚くほどよくみゆることあり、此症は二三日も過ぎる内に死するものなり、ひたとだまざるものなり、(中虚)

○森立夫、引中虚)偏虚偏實の者は、皆爲死、偏虚とは、腹脊につき、筋のみあつて、腹になにもなく、動氣とぼしきもの速くして、若身熱、欲去衣、是陽の極なり、偏實とは、腹みち、鳩尾へ取上げ、手も入がたく、動氣遅く靜にして、どきどきとうち、身もだえする、是陰の極なり、共に爲死、

○(同上)死證の動氣を知る事、無病平和の人をして、道一町ばかり走らしめ、直に其人の鳩尾動を可視見、無疾の人といへども、常に如此の動あるものは不_レ久、病人に有_レ之ときは必死す、靜なるは陰なり、動くは陽なり、陽動する時は死するの謂なり、是偏陽なり、孤陽なればなり、

○(同上)動氣髣髴として、如電光なるものは死す、

○(同上)腹肉太だ奪して、皮膚脊に着き、鳩尾兩肋の下も、臍邊大に陥る者は、藏府直にあらはれて、手應へすること痞塊の如し、是大虚不治の症なり、庸醫は不知して病邪とす、

○岩戸腹と云あり、老人など、本腹の張るに、俄に腹皮背にひつつく症あり、不出三年して死す、

藏真竭る故なり、又任脈通りに中りて、火箸の如く、三道鬱急して下に達し、臍に至て左右に分るる者あり、不出三年一發大病して、多くは死す、(泰州)

○惣て大病に及びしもの、臍下の動必ず上へ上り、胸下につき上り死す、さなきときは、肉分以上にあらはれて、甚しきものは皮下までも動くやうになるなり、此必死の候なり、(舞鹿)

病人の臍へ、我中指をあて、動氣あらば、死すると知るべし、左にある歸一湯を與へて、動氣静まらば、生ると心得て療治すべし、とかく動氣出る人は死するなり、此歸一湯をあたへ、神闕の動氣静まらば、療治すべからず、萬法歸一湯は、益氣湯加桂附なり。

○右大極源流腹診傳に出づ、寶永中の人、山田昌庵、

診病奇核終

五雲子腹診法

男雲統筆記
森養春院法印傳家祕本

五雲子曰、病を候ふに、望聞問切の四者を以てす、然ども病者に對したるばかり之を候ふときは、病人に臨て標的とすべきことなし、(故先知其常體、而後云々、同上)如常人に對して其人の病邪ある處、或は性知までも候察し、其形を見て、氣血の虛實をも察し、平生これのみ心を放たず、時として棄慢することなければ、自然に背腹の様子は云ふにたらず、藏府心知のことまで、掌を見るが如くなるなり、平生藏象に工夫を用て佳なり、



先づ人背の模様を見るべし、肩の廻りは、骨の會するところなるに因て、氣血滯りやすし、故に肉も

亦厚くなるなり、魄戸膏肓神堂の邊、滯るところなり、此邊宜く灸すべし、右の方、心俞督俞、今按 督俞 詳ならず、一本膏俞に作る、然 膈俞の邊を推ときは、食滯の症を知るべし、脾胃の食氣昇り聚りて、必ず癰 其位低し、從ひ難きを覺ゆ、毒を發するも、亦このゆゑなり、右の方如し此なれば、必ず左の京門の邊隆脹するなり、其時は右の督 愈膈俞、左の京門に灸すべし、左の方、心督膈を推とき右の京門隆脹するは、是思慮多くして、心肝 鬱する故なり、左の方、督膈俞右の京門に灸すべし、背の大抵を見て、虚實を知べし、氣稟怯弱の 人は、必ず十四十六椎の左の京門の邊より、背の大骨弓の如くに曲るなり、或は龜背の如く出るもあ り、能々心を付て見べし、



右の如く圓かなる腹は、上々無病上壽の腹なり、然ども倘強きを頼て、飽酒飽食するときは、却て病 者となるなり、我は病者なりと云に、二種あり、右の如く、氣稟至強ゆゑ、飽くまで、不養生にて病者 となるあり、又氣稟怯弱にして、至て病身なる生れつきにて、病者なりと云人あり、又我は幼少より 病者なりと云人、うまれつきは強けれども、幼少の時、食傷して、養生不_レ宜、病者の如くなるあり、 是は生質病者にはあらず、能々考べし、堅枕高枕飲酒の人、煙草を好む人、皆三焦の氣強き人なり、

元氣の強と心得べし、實症なり、柔枕低枕を好む人、酒を飲ざる人、煙草を好ざる人、皆三焦の氣弱 き人と知べし、大槩右の如し、然ども酒を飲ざるに強人あり、此は飲慣るれば上戸となるものなり、 上戸も氣が弱くなれば、酒を飲ことならぬなり、平生の形恰好を見、虚實を考知べし、古人肩を撫て 生死を決すといふなり、二六時中、心を放たず、工夫すべし、



此の如く、右方の筋骨下り、或は高くなるは、常に食養生の悪き人と知べし、飲食濁氣昇て痰となり 筋骨に粘着して、骨高くなり、清氣升らざるゆゑに筋骨さがるなり、此の如くなれば、背の右の心督 膈俞の邊も高くなるなり、飲食を節にすべし、



如し此左肋骨下り、或は高くなるは、氣を勞する人と知べし、或は軍法等書籍に心力を殫すか、或は 平生謀慮して心力を勞するかなどにて、心肝鬱滯する人如し此としるべし、



如レ此右へ痞すれば難治なり、萌ばかりにて堅まらざるうちは、健脾丸可レ治、此は膏梁の變なり、故に無病息災なる大丈夫に多き證なり、硬して鳩尾下へひろがれば、不食となる、黃疸にもなるなり、不治の證なり、酒食厚味、夜分に蕎麥麩を食ひ、鯉のさしみ等を好む人にあるなり、今俄に出來たるものにあらず、歳月を積んで生ずるものなり、したぢよりの催なり、



兩肋骨廣さほど無病なり、鳩尾の下に入の深さは、病者の腹なり、



如レ此に段々なるものあり、二重腹と號す、病者の腹なり、細き帶の如く、之を探れば、ぐれりくと

するは、脾胃虛、大包のゆるまるなり、



如レ此に、大綱を張たるやうなる物あるは、四十以後、五十以上の人、大食して如レ此になるなり、傷食してぐれりとなり、半身不遂となるなり、一旦治するとも、又傷食すれば、中風となるなり、或は膈症となる、不治なり、

右 左



如レ此右つゝぱり、動氣も右によりてうつは、脾胃の傷み、液燥たりと知べし、病人は左方つかへたりと自云ものなり、下痞の薬は用べからず、八珍湯に増減して、滋潤を專にすべし、

右 左



如レ此左へ痞へたるは、厚朴、青皮、莪朮、香附、酒製黃連、三稜一本莪朮なく、
枳實香あり、の類を用べし、然ども惣躰見
合すべし、



如レ此中道にある痞は、香附、縮砂、山查、神曲、麥芽酒芍藥、
酒芍藥、當歸酒青皮一本无、
砂仁芍藥等有、
酒芍藥、等の藥、虛
實を考て、療治すべし、



如レ此小腹痞へたるは、疝か、或は大便秘結するか、考べきなり、疝ならば、大茴、小茴、木瓜、木香、山查、青
皮、枳榔一本无、
香有、
枳榔、など宜し、以上十二則、
原本並に、
家君曰の字を冠せり
或曰、患人をして、仰臥して兩足を伸べ、兩手を股外へつけしめ、男は左、女は右乳下を平手にて按

し、五六息の後、其手を下し、上腕より次第に之を按して、病人の心弱者按此發明
ならず虚なり、按して、痛
もの實なり、輕按して痞するは、邪在レ表なり、重按して痛は、邪在レ裏なり、心下すき、臍下ふくれ
て、按こたへあるは、腎精の實なり、心下ふくれ、臍下すきたるは腎虚なり、臍の上下、なれあうて
何の碍なく、按しこたへあるは、平常無病の人なり、或は堅、或は柔にして木枝などを袋に入たるを
探るが如き者は、縦ひ無病といへども、必ず病を發するものなり、左右に豎筋張たるは、性氣の虚な
り、生死を診するには、臍下三寸關元の穴を候ふべし、此穴は天の一元の氣を受るところにして、三
焦の根本なり、故に之を按して、有力無力を察し、以て生死を知らり、

五雲子腹診法 終

診腹之法、唐山反無其說、五雲子之於此術、豈宿有獨得、抑歸化之後、觀我醫之伎、就有發明乎、茲編余獲
之千養春後人雲悅、又獲之千兒醫人見元德、二本稍有異同、仍互參精訂、以附千奇後之後、庶足相輔而行、乙巳
歲、修禊日、三松齋記、堅

右診病奇佞は、實に希世の珍書なり、皇國諸家歴驗の診腹秘法、ことごとく此書に漏るゝことなし、
其うち予が高祖父中虛君の撰まれし、意仲玄奥中の語にも載せられたり、これ本と予が家の秘訣にし
て、松井雲亮只一人に傳られたるよし、雲亮は仲和の二男春里公の女仲和の門人松井等儀に嫁して生む所な
り、雲亮亦愚然門人にて、五雲子流の大方脈を以て仙臺に住ふ、外に門人

雲庭ぬすみ寫せるよし、此兩家より出たるもの歟、今家傳腹診の此書にもれたる所の一二を、界欄上に節録(校刻者曰、便宜上、森立夫、引中虚として、本文中に挿入せり)し、且末に藏府の部位を附録し、又圖を作つてこれを示す、人をして明らめ易からしむるのみ、

淺井南溟の書中に、肺先脾の募腹滿の言あり、此圖に就て始て其處分明なり、これによつて攷るに、南溟所引古傳なるもの、亦往々我意齋流の訣に合せり、蓋源を同するものか、

北村壽安の説は、全く味岡三伯診腹秘傳と符合す、三伯亦意齋の流派のよし、中虚の書中にいへり、今逐一三伯の書に校し、不足ものはこれを補ふ、

五雲子腹診法といふもの、これ恐らくは森養春院法印雲仙君の發明にして、男雲統子の筆記せらるゝものなるべし、それを五雲子の訣と誤傳せしなるべし、五雲子決して箇様の成書なし、藥方書の外は、土岐長元醫工入式の序のみ、作文のことは、中虚君くれぐれも言置れたり、且元本二通、共に家君曰とあるよし、五雲子ならざること愈明らかなり、五雲子ならば、師傅とも、先師ともいふべし、何ぞ家君と云ふことを得んや、乍去藥味のやうすなど、五雲子流の語氣なること、自ら知るべし、雲仙君は卓然たる一家なれば、箇様な發明もあるべきことなり、雲仙君の發明醫案等、ことごとく家書中に見えたり、

丁未抄冬初十日、書于三州津久井縣勝瀬之温知藥室、立之、

臟腑部位

森立之附録

腹部に藏府を配列して、その虛實邪正を診し、死生吉凶を斷はること、尤も家秘要術也、先南面して上下左右を分つ、左は東方、屬木、肝膽、右は西方屬金、肺大腸、鳩尾は南方屬火、心、水分は午、火對心、其氣を受く、故に小腸主之、臍下は北方屬水、腎膀胱、中脘は中央、屬土、脾胃主之、是五行四方中央に位する理の當然也、臍下氣海丹田の地より、天一の水と云こし、相生左旋して、又臍下にかへり、終て又始る、生々不息、天地陰陽五行の道と相同じ、是亦牽強附會の説にあらず、内經難經に出たることなれども、古人未發之、難經五十六難、五積の名を分て、左脇にあるものを肝の積と云、是左脇はすでに肝の部爲るの證なり、余の四藏も此例なり、推して可知、但脾の部は、胃脘とのみ云て、上中下の分なしといへども、三脘のうち、中を以て主とすべし、故に中脘を脾胃と定む、腎の積に、少腹と云ものは、則臍下なり、心の積に臍上と云は、胃脘より上を云、是鳩尾とさすこと有故、そのうへ、十六難に、五藏の脈と症とを論ずるに、動氣の所在を以て、逐一に斷之、たとへば肝脈を得ては、臍左有動氣と、本義に、臍左、肝之部也と云々、四藏亦此例なり、但當臍の動氣を以

て、脾病とすること、五十六難と矛盾するが如しといへども、脾は腹の上下左右の中央なれば、中宮脾土の位とも云べし、又按ずるに、内經刺禁論云、肝生於左、肺藏於右、心部於表、腎治於裏、脾爲之使、胃爲之市と云々、表は上なり、裏は下なり、使と云、市と云は、是上下左右へ通すべきゆゑなり、非中央にしていづくんか求めんや、さて此部位によつて、藏氣をよくうかゞひ得べし、(中虚)

又胃の府 鳩尾より二寸五分下を云、

脾の俞 胃府より一寸五分下を云 共之按、下字(帝本、共之は即中虚なり) 恐上字誤

三焦 臍より一寸五分下を云、

元氣 三焦より一寸下を云、

根本 元氣より一寸五分下を云、

肺 先、鳩尾の兩わき章門までの間を云、一

脾の募 脾の俞の兩わきを云、

兩腎 臍の兩傍を云、

腓肉 鳩尾胃府の兩腎までの左右の堅筋を云、又腹筋とも云ふ、(帝本、立之謂、腓肉詳見、于二腹兩傍中一)

鳩尾有餘は 熱、咳、蟲とす 有餘とは實するなり

不足は 無病の平人なり、鳩尾は無物して虚とみゆるがよきなり、つまるは凶也、不足とは虚するなり

胃府有餘は 蟲、積、傷食とす

三焦有餘は 血塊癥瘕と云

不足は 同二鳩尾、是亦無物して虚とみゆるがよし、少しも邪氣あれば實するなり、

元氣有餘は 眩暈頭痛とす、

根本有餘は 淋病秘結とす、

脾募有餘は 瘧、濕とす、

鳩尾の兩傍有餘は 左は血病 右は氣病とす、

肺先不足は 同二鳩尾不足、肺は清虚を貴ぶとて、左より右やはらかなるを無病とす、左は肝木ゆゑ、

右よりつよく實するがよし、

腓肉有餘は 痲痺とす、

以上腹部の名は、意齋流の大秘事なり、(同上)

又臍の四方に、東西南北を建て、十二支を配すること、臍下は北方子の位とす、臍上は南方午の位、臍左は東方卯の位、臍右は西方酉の位なり、臍下子の位より、次第に左旋して、亥に終る、如此四方と十二神即十支とを建て、道氣運之、それ子は十一月一陽來復の卦なり、それより四月巳に至て、乾の卦となる、是一陽より生々して、六陽に至り、四月は純陽無陰の時なり、されば子より巳に至ては、陽

氣進み昇り、東方春の令を行ひ、萬物發生して、人物有餘の氣を得、故に道氣子の地より辰巳の間に動ずるは、造化の道にして順とす、午は五月一陰生ず、天風姤の卦なり、それより十月亥に至て、坤の卦となる、是一陰より生々して、六陰に至り、十月は純陰無陽の時なり、されば午より亥に至ては、陽氣退降り、西方秋の令を行ひ、萬物肅殺して人物不足の氣を得、故に道氣午の位より亥の位に動ずるは逆とす、不足にして死に近し、これ必竟動氣臍の下臍の左にあり、又臍上にあるも順なり、臍の右にあるは逆なることを發明して、此道理をあかすなり、且左は肝木、陰中の陽にして、發昇の氣を主るが故に、左に動ず、右は肺金、陽中の陰にして、收降の氣を主るが故に、右には動せぬ道理なり、之に反する者は、造化の道を失ふなり、逆に非ずして何ぞ、

四方四隅をひろく指すなりと、必竟陰陽の升降進退の道理を以て、動氣の左右に見るゝ處の常變、吉凶とを示さんがためなり、

左腎は丑寅の方にして、曆家に鬼門と云處なり、人身に於ても亦かたく守るべき處なり、醫者常に能く心を此地に用ひよ、諸病此地に根ざしやすきゆゑなり、(同上)



右 左



(帝本、立之按、千金十七、積氣第五灸法云、太倉一名胃募、在心下四寸胃管下一寸、又曰、胃募二穴、從乳頭部一度至臍中、屈去半、從乳下一行度頭是穴所謂胃募即脾募也)



此段家秘第一口訣
所謂不可以書傳
若者在焉

右此段家秘第一口訣
所謂不可以書傳者
在焉、

此三圖立之所作、說詳于
前文中、

診腹秘傳

一、臍者人身之根本也、因之腎間之動氣診する時は、臍中を按じて見るにたもちありて、しつかりとするは、無病之人也、臍中を按ずるに、無力、底までぐわつくは難治、元氣絶也、先づ腹を見れば、第一臍を可_レ見也、本と虚證之人、腎精侵す時は、二三日も、臍中に動氣あるなり、腎氣有餘の人、侵す時は、あくる日まで動氣あるもの也、

一、腎水の虚は、臍より以下、石門關元のあたり、任脈通りに、ほそき箸を伏せたる様に、正ん中に筋だつ也、此即腎水の虚也、滋陰の薬を以て可_レ補也、腎水虚し、下相火のたかぶるなり、是火動の證となる也、動氣左にあるは不_レ苦なり、臍下より、右について、上へ動氣の昇るは難治なり、右に動氣盛なれば、左もいよ／＼盛になり、腎虚の證も、先づ中焦より衰る故に、中脘以下任脈通りに、筋ばり、さて臍下任脈通り迄も、筋ばる也、

一、脾胃虚は中脘より以下、臍のあたりまで、任脈通りに箸を伏せたる如くに筋立つものなり、此即脾胃の虚也、中焦を補ふ薬を以て可_レ補なり、

一、凡そ諸病に通じて、腹の見やう三つあり、中脘より臍下まで按して見るに、ぐわ／＼として、底ま

で無力病は難治の證也、又腹を見るに、大抵すのをかきたる如く、筋ばりたるあり、是も難治の證也、又腹を見るに、脹滿之如くにはりて、腹の上を見れば、油紙の如くきら／＼とするは、是亦死證也、傷寒の裏證などに腹如是、萬に一生なきもの也、時疫之證も同之、

右に云、腎間の動氣、如何して有といへば、然、夫萬物出生初、天一の水也、次地二の火對同して而生ず、左腎は水、右腎は火、右腎の火は昇らんと欲し、左腎の水は降らんとす、因之陰陽水火昇降の生氣を以て、腎間の動氣と云也、溫和に動氣あるを以て、平人宜しとするなり、動氣甚しきは、火動の病也、非常、

按八難云、寸口平而死者如何、然也、十二經脈者皆係生氣之原、所謂生氣原者、十二經之根本也、腎間動氣也、是五藏六府之本、十二經脈之根、呼吸之門、三焦原也、一名守邪之神也、寸口脈平而死者、生氣獨絕内也矣、寸口通稱寸口也、腎間動氣、口傳諸說不同、難一決也、天一水、地二火、易河圖に詳也、口傳也

一、痢病泄瀉の證、中脘より以下、下脘水分のあたりにつかへあらば、たとへ數日之證なりとも、檳榔枳殼の類にて押し下すべし、又下脘水分のあたりにつかへなくして、按して力なくば、たとひ新病の痢病泄瀉なりとも、補藥にて可補也、

一、水腫脹滿證、腹内甚だ脹りたるに、臍をゆり動して見るに、臍後ろの十四の所をはなれて、あちへ

うごき、こちへうごき、あまり臍はりて、臍のうしろのひかへされたるなり、必死の證也、たとへ腹つよく脹りたりとも、臍を動かすに、十四の所へよくつきて、左右不動は可治也、すべて腹内の脹る證をうかゞふ事、皆如是、

一、中風を病むべき人は、二三年前より、脇章門のあたりより、よわごしの所に、たてに筋あるものなり、然るに其所の筋、中風病むべき人なれば、必ず其所の筋切れたる様になりて、ぐわ／＼として力なくて、それが左にあれば左半身不遂、右にあれば右半身不遂也、さて右なれば易治也、氣のめぐる故也、左は氣めぐり兼ねる故に、難治也、治法は順氣之劑、補氣之藥を可兼也、二三年前より知て如是療治すれば、中風を可免也、又脇之筋ありといへども、左右之内は、どちらなりとも不遂は、接證也、尤中風よりも難治なり、

一、瘰は諸説多しといへども、本濕熱より生ずるもの也、偕腹は大形右へつかへるもの也、中氣不足する故也、先陽明胃經に、邪をうくるもの也、右へつかへ有て、正氣つよきは、不換金正氣散、又正氣よわきは、人參養胃湯、或は補中益氣湯可なり、初め腹を見て、邪正共に強きは、九味羌活湯可なり、左つよきは惡寒甚、右つよきは熱甚、惡寒甚しきは、酒製の柴胡佳なり、凡瘰證は前日の養生肝要也、藥を用ひば、右の藥の類、或は九味清脾湯之類、三五貼もあたへて、食物を減少すべし瘰日の早朝には、但虛實を見分て、補中益氣湯人參養胃湯、或は截瘰飲之類にて治する事なり、

一、惣じて年若き人の腹、臍より以上脹て堅く、臍下を按して無力よわきは、腎虚の人也、臍下に氣のたもちありて、上ほど少づゝやわらかなるは、一段と能き腹なり、年老たる人は、下虚上實する故に、臍下の氣弱くやわらかにして、臍上より鳩尾のあたりまではるもの也、是年老の常也、又年老いて臍下の氣たもちの弱きは、成るほど無病の人なり、

一、惣じて上腕の所より脇少し間につかへあるは、食はくへども、食後に必ずつかへるものなり、又上腕のあたりより、左右へ廣くつかへたるは、食に味なきものなり、右のつかへたるは食滯なり、枳實可也、左につかへたるは疝氣也、青皮可也、

一、灸治は腹診して、而藏氣の虚實を見合、塊ある處に隨て、或は三の俞、膏肓十一二十四等宜に隨ふべし、尤腹診肝要なり、

一、頓死の腹は、上の皮膚は實して底に力なきものなり、是陽實陰虚として、生れつきになる事なり

一、漉々之汗とは、上焦にばかり出る汗也、多くは産婦にある事なり、死證也、私に玉汗とてねばりたる汗の出る義なり、

一、渾々之脈とは、元氣之所をはなれて、上鳩尾に動脈のうつ事なり、

一、爛々之熱とは、上部ばかり熱のあることなり、此陰陽隔絶して死するなり、

一、凡病氣不足し、正氣不足するは不治也、たとへ藥にて一旦氣色快しといふとも、不食し、亦形容

不_レ宜、内證ならずば不治也、

一、小兒之痲瘡、毒氣甚多く、瘡色惡しといへども、腹下を按して見るに、相火の動なきものは可_レ治、たとへ痲瘡見合よろしといへども、臍下の動氣甚きは難治なり、

一、懐妊と枯血と見分け様は、平旦に臍下を按して見るに、懐妊なればこんもりと高く起て動くものなり、血塊なれば高く起るといへども、動氣なきものなり、さて男子なれば右の方也、女子なれば左の方にある也、惣じてつかへの類は、朝とくは、必ず表上へ浮ぶものなり、

按に畢竟診腹之義は、自己の腹中を以て診してうかひ可_レ考也、自己の工夫なくしては、腹内見分難_レ及者也、懐妊血塊の見分け様は脈にても神門之穴の動脈にても、難_レ診候_二者也、能_レ々可_レ考也、

(以下朱書) 膈の腹は、中腕の底に板などを置たる如くに堅きものなり、虛里の動の候、内經にありといへども、自己の考なきは用にたち難きものなり、夫平人の常右の方には動氣不_レ見、左には必ずあるものなり、左の脇より、左の乳の下に至て動氣あるを見るに、溫和にして手に應ずること靜なるは、平人の常氣これを宜とす、總て支結のたぐひ、此動氣充て實牢なるもの必死の候なり、喘息の吉凶を定ること、此法に越ることなし、能_レ々可_レ修鍊_二而已

右朱筆者、以_二草刈三悦_三悦_三門_三人_三自書本_一校_レ之、弘化丁未十二月廿五日、森立之

三伯家秘傳卷物

壹軸

目錄

- 營衛三焦辨
- 痰瘧
- 陽有餘陰不足論
- 相火論
- 是動氣生病之辨
- 廿五難 末に寶永五月廿九日寫之畢、鴻鶴とあり
- 五行相生相尅辨 末に寶永云々とあり如前
- 藏府之部與皆之愈有異同
- 權衡錄兩之法
- 腹診
- 十四經 (此項朱書)
- 一流三藏之脈法 末に味岡門人草氏榮浩書とあり

食物能毒 (和名付) (此項朱書)

醫綱圖解 末に春戊辰望日草氏榮浩書甲子三越書之とあり

取穴法 末に甲申年仲夏念一日書寫畢とあり

回春考八則 (此項朱書)

運氣候節之處 三才圖會時令一

四花傳

平人氣象論 末に友乙誌之とあり

中風偏枯論

腹診二 (朱書) 末有缺

度量衡 (朱書) 末缺

(以下朱書) 右一卷は草刈三越自筆のよし、嘉内書目のうちにあり、診腹秘傳は何人か此うちより抄録したるものなり

嘉内又云東庵流の秘説ことごとく此書にありと、按するに三伯は墨庭東庵の門人なればかくいへるなり

右八張、森立夫立之從ニ津久井縣ニ所ニ録寄ニ

〔右八張とは、（原本は八枚なり）診腹秘傳以下の八張を云ふものならん、臟腑部位は森先生の附せられたる所又診病奇怪界欄上の節録（便宜上、森立夫、引中慮として、本文中に挿入せり）が先生の物せられたるものなることは、前第九十三頁同書の卷末に先生の附記せられたる所に依りて明なり、唯諸所に不明の文字ありて、意味通じ難きものあるも、校合に由無きは、甚だ遺憾とする所なり、校刻者附記〕

昭和十年十二月十五日 印刷
昭和十年十二月二十日 發行

診病奇怪
定價金參圓

校刻者 石原保秀
東京市澁谷區羽澤町五十三番地
印刷者 清水一夫
東京市麹町區九段一丁目十四番地
印刷所 京華社印刷所
東京市麹町區九段一丁目十四番地

發行所

和漢醫學社
東京市澁谷區羽澤町五十三番地
電話 青山二三八三番
振替 東京三一三六九番

302
204

終